

和歌山市

# 木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡

発掘調査報告書

1989. 3

同志社大学考古学研究室(編)  
和歌山市教育委員会



発掘区と車駕之古址古墳（北より）



大溝検出状況（西より）

## はじめに

和歌山市はいうまでもなく和歌山県最大の都市である。このことは現代にかぎらず、古代においても考古学的な遺跡の多さと、さらに一つ一つの遺跡の大きさや内容の豊富さなどからみて、すでにその片鱗をのぞかせている。

和歌山市域は、古代遺跡の数が多いだけでなく、日本の遺跡のなかでも特異なものがあり、それがすぐれた地域文化の存在を証明している。この地域文化とは、今日の紀州文化の母胎の一部につながるものであることはいうまでもなく、私も最近、「紀伊の国と韓の国」(『韓国の古代遺跡』百済・伽耶篇中央公論社)のなかで述べた。その論考で主に扱ったのは、和歌山市域でも紀の川北岸の土地であり、奇しくもここに報告する木ノ本遺跡の所在地をも包括している。

木ノ本遺跡の調査は、古くから著名な車駕ノ古址古墳にたいするものであったが、その墳丘にたいするものではなく、隣接地にたいしておこなったものであった。しかし発掘調査担当者や参加者の努力、さらに土地の人たちの協力もあって、予想以上の成果をあげることができた。そのことは、本書の各章節で報告するとおりである。日本文化は、さまざまな特色ある地域文化の総合されたものだといわれ、和歌山の文化も代表的な一つの地域文化であることはすでに学界の定説とみてよいが、本書の刊行によって、さらに一つの基礎資料ができあがったことをよろこぶものである。

1989年3月

同志社大学文学部教授

森 浩 一

## 出版に際して

和歌山市は紀ノ川の河口に位置し、ふるくから人々の居住がはじまり、旧石器時代から近代にいたるまでそれぞれの時代の各種の文化遺産が数多く残されています。これらの文化財を保存し、次の世代へと伝えてゆくことは、私達現在に生きるものの課題であります。しかしながら、これらの文化遺産とくに埋蔵文化財については、近年、建設・土木等各種の工事が増加し、その保護には困難な点も多々起こっていることも事実であります。

本書は、昭和61年3月、和歌山市立木ノ本児童館建設にあたり、建設予定地が木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内にあるため、事前に実施した発掘調査の報告書です。調査の実施は同志社大学文学部考古学研究室にお願いをしてすすめてまいりましたが、このたび調査資料と出土遺物の整理・研究がまとまりましたので、その成果を報告書として刊行する次第です。

調査にあたっては地元の皆様方に多大の御協力を賜わり、誠にありがとうございました。また、調査期間中に開催しました現地説明会には多くの方々が御参集くださり、これは地域文化への関心の高さを示すものといえましょう。調査で検出された大溝遺構は万やむを得ず工事に伴って取り壊さざるを得ませんでしたが、その一部を樹脂加工のうえ切り取り、児童館の前庭に展示するなど、地域の歴史を知るうえで有効な活用を計ることができました。

本書が郷土に関する歴史知識を豊かにするとともに、日本考古学の進展に役立つことを願う次第です。

本書出版に際して、公私御多忙のところ調査の指導にあられた同志社大学文学部森浩一教授および調査を御担当いただいた同志社大学文学部講師鈴木重治先生に厚く御礼申し上げます。また、早春とはいえ寒風吹きすさぶ中、真摯な学究的態度をもって調査にあられた同志社大学文学部考古学研究室の調査員の方々に心からの敬意と感謝の意を表します。

平成元年3月

和歌山市教育委員会

教育長 石 垣 勝 二

## 例 言

1. 本書は、和歌山県和歌山市木ノ本字釜山に所在する木ノ本釜山遺跡（木ノ本Ⅲ遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、和歌山市立木ノ本児童館の建設に伴うもので、和歌山市教育委員会が主体となり、同志社大学考古学研究室がこれに協力した。
3. 調査は1986年3月3日から4月11日まで実施した。尚、それと併行して、隣接地の車駕之古址古墳の測量調査を実施した。
4. 調査事務の関係者は下記の通りである。

（発掘調査）

教 育 長 石垣勝二  
社会教育課長 木村二郎  
課長補佐・文化財係長 永井佑治

（報告書刊行）

教 育 長 石垣勝二  
教育審議監 海野榮喜男  
文化振興課長 芝本弘雄  
文化財班長 松本信明

5. 現地調査担当者は下記の通りである。

調査指導 森 浩一（同志社大学教授）

調査主任 鈴木重治（同志社大学文学部講師・校地学術調査委員会調査主任）

調査員 木下晴一（同志社大学大学院生＝当時）

“ 鈴木 信（ “ ” ）

“ 坂 靖（ “ ” ）

調査補助員 穂積裕昌・藤川智之・田村悟（同志社大学学生＝当時）・益田雅司（奈良大学卒業生＝当時）

6. 出土遺物の整理・図面の整図等は、同志社大学考古学研究室で行なった。
7. 本書の執筆は、調査担当者がこれにあたり、目次に文責を示した。尚、本書の編集は、鈴木重治と協議の上、坂 靖が担当した。
8. 調査にあたっては、下記の諸氏の暖い御配慮を頂いた。記して謝意を表したい。  
坂本利夫氏・神保豊氏・坂本好子氏・竹原ちえ子氏
9. 尚、出土遺物は現在仮に同志社大学考古学研究室に保管している。

# 目 次

第1章 調査の契機と経過	(坂 靖)	1
1. 調査の契機		1
2. 調査の方法		2
3. 調査の経過		2
第2章 遺跡をめぐる環境		3
1. 地理的環境	(木下晴一)	3
2. 歴史的環境	(穂積裕昌・藤川智之・田村悟)	5
第3章 調査の概要		15
1. 調査区の設定	(鈴木 信)	15
2. 層序	( “ )	15
3. 遺構	( “ )	17
4. 遺物	(鈴木信・坂・藤川)	20
第4章 車駕之古址古墳の調査		53
はじめに	(坂)	53
1. 墳丘の現状	( “ )	53
2. 後円部隣接地点の調査	( “ )	54
3. 墳丘の規模	(坂・田村)	59
第5章 遺構・遺物の検討		61
1. 遺物の摩耗度からみた遺跡の形成過程	(鈴木信)	61
2. 砂層の粒度組成について	(木下)	68
第6章 まとめ		69
1. 調査のまとめ	(坂)	69
2. 車駕之古址古墳の位置づけ	(坂・田村)	71
3. 紀ノ川北岸地域の地域的特質	( “ )	71
総 括 調査の総括と学術上の課題	(鈴木重治)	73
付 論 淡輪技法の伝播とその問題	(坂・穂積)	76
はじめに		76
1. 「淡輪技法」の認識と問題の所在		76
2. 「淡輪技法」の製作手順		77
3. 「淡輪技法」出土遺跡の概要		83

4. 「淡輪技法」の伝播	94
①淡輪技法の出現	94
②淡輪技法の展開	96
5. 「淡輪技法」の背景	98
おわりに	100

## 挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 遺跡周辺の地理的環境	4
図3 調査地周辺遺跡分布図	6
図4 調査区地区割り図	15
図5 トレンチ断面図	16
図6 V層平面図	18
図7 VI層平面図	19
図8 大溝平面図	21～22
図9 大溝断面図	23～24
図10 A・B区VII層平面図	25
図11 E・F区II・III層出土円筒埴輪	26
図12 A～D区V層出土円筒埴輪	27
図13 大溝出土円筒埴輪(1)	28
図14 大溝出土円筒埴輪(2)	29
図15 大溝出土円筒埴輪(3)	30
図16 各層出土土器・陶磁器(1)	41
図17 各層出土土器・陶磁器(2)	42
図18 車駕之古址古墳墳丘測量図	54
図19 車駕之古址古墳第1トレンチ・第2トレンチ土層断面図	56
図20 車駕之古址古墳第1トレンチ・第2トレンチ土層平面図	57
図21 車駕之古址古墳第1トレンチ出土埴輪	58
図22 車駕之古址古墳第2トレンチ出土埴輪	59
図23 遺物の摩耗度と重さの関係(1)	62
図24 遺物の摩耗度と重さの関係(2)	63

図25 遺物の摩耗度と重さの関係（3）	64
図26 遺物の摩耗度と重さの関係（4）	65
図27 調査地の砂層の粒度組成	68
図28 「淡輪技法」の分布	85

## 表 目 次

表1～表7 円筒埴輪観察表	33～39
表8～表9 土器観察表	46～52
表10 各層の年代	61
表11 遺物重量集計表	66
表12 A・B区Ⅱ～Ⅴ層・大溝・Ⅴ層土壙群摩耗度百分率表	66
表13 部位別重量集計表	67
表14 摩耗度別接合回数集計表	67
表15 淡輪古墳群との埴輪技法の比較	70
表16 「淡輪技法」集成表	84

# 第1章 調査の契機と経過

## 1. 調査の契機

木ノ本釜山遺跡は、和歌山市木ノ本字釜山に所在する。当該地域は、『和歌山県遺跡地図』によると、木ノ本Ⅲ遺跡として弥生時代～中世の遺物散布地として記載されており、また、すぐ南には木ノ本古墳群と称される前方後円墳・円墳計3基からなる古墳群が存在している（図1）。

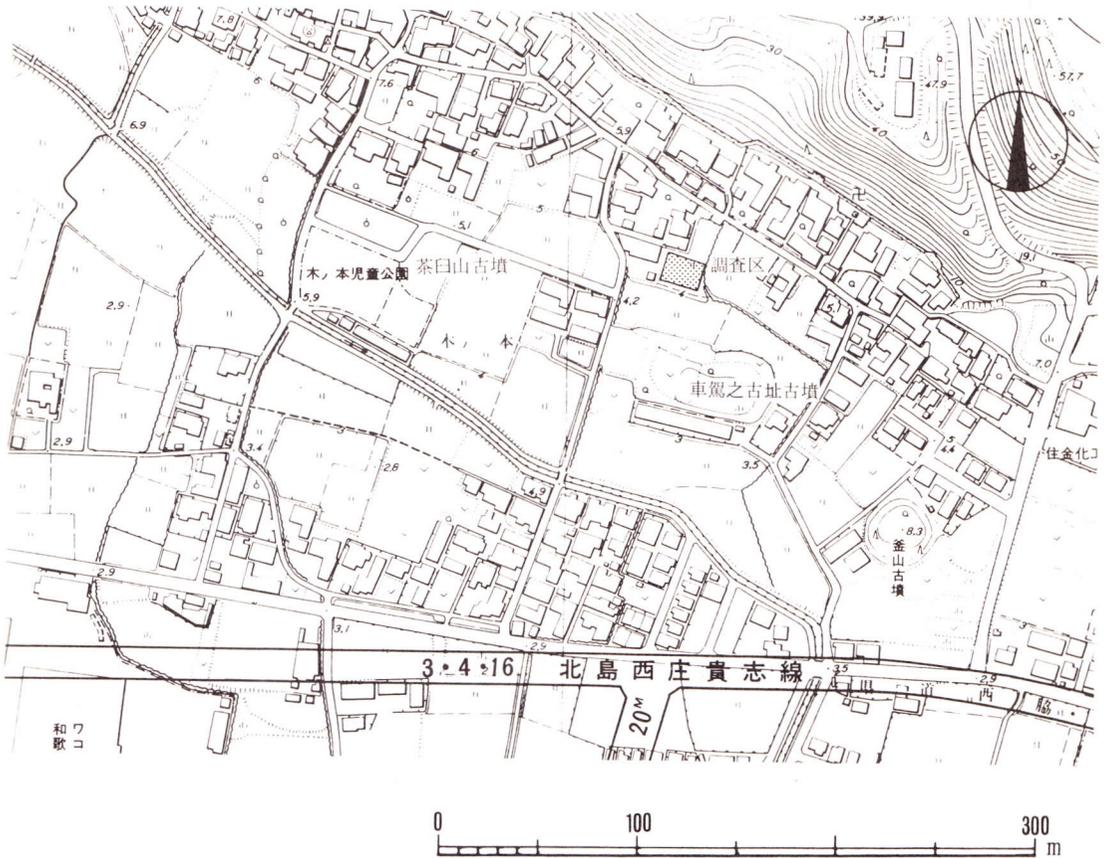


図1 調査地位置図

そのような中で、その木ノ本古墳群の中の一基である車駕之古址古墳のすぐ北方の水田に、児童館の建設が計画された。建設予定地が木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内であったことや、車駕之古址古墳隣接地で外堤等の検出が予想されたこともあって、事前に発掘調査を実施することとなった。

調査は、和歌山市教育委員会が主体となり同志社大学考古学研究室がこれに協力して、現地作業及び整理作業を行なった。

## 2. 調査の方法

調査地の現況は、水田であり、遺物の散布は確認できなかった。そこで、4ヶ所に試掘溝（2 m × 2 m）を掘削し、層序の確認を行なった。<sup>(1)</sup>そのうち、少量の遺物と遺構を確認した古墳に最も近い位置の第3トレンチを拡張し、発掘調査区を設定した。調査区は、10 m × 5 mグリッドで、4区に分割し、A～D区と呼称した。そののち、C・D区の遺構確認に伴い、調査区を北方に2.5 m拡張し、E・F区を設定した。調査面積は250 m<sup>2</sup>で、実働31日を要した。

(1) 試掘溝の位置は、p.54図18参照

## 3. 調査の経過

1986年1月 和歌山市教育委員会が、同志社大学に調査協力を要請

2月 和歌山市民生局厚生課長 高田芳男氏・施設係長 石井忠文氏と同志社大学鈴木重治・鈴木信が現地観察後協議

2月 坂、木下、鈴木信の3名が現地を確認

3月3日 調査を開始。第1～第4トレンチ（試掘溝）の掘削。車駕之古址古墳南の文化住宅に逗留。

3月4日 調査区（A～D区）の設定

3月5日 表土ハギの開始

3月8日 表土ハギ完了

3月12日 V層、中世素掘り溝確認

3月12日 車駕之古址古墳の伐採開始

3月13日 慰霊祭

3月21日 大溝確認

3月24日 E～F区拡張

3月24日 古墳の測量開始

3月29日 記者発表を行なう。

3月30日 現地説明会、来訪者多数

4月8日 大溝清掃完了、A・B区掘削、全景写真

3月25日 車駕之古址古墳第1～第2

～4月8日 トレンチ掘削

4月11日 作業完了、撤収。

6月11日～13日 大溝貼石の移築作業



写真① 移築のための樹脂注入



写真② 移築用の木枠の設定

## 第2章 遺跡をめぐる環境

### 1. 地理的環境 (図2)

木ノ本釜山遺跡は、南海電鉄「和歌山市」駅の西北約4km、紀ノ川が形成した沖積平野と、その北縁をなす和泉山脈とが接する所、標高約4mに位置する。本節では、地形環境と土地利用の観点から、遺跡を中心とする紀の川北岸地域の地理的環境を概観したい。

紀ノ川下流平野の地形発達史については日下雅義氏の研究<sup>(1)</sup>があげられる。日下氏の作成された地形分類図によると、遺跡周辺の地形は山地と低地に大別され、低地は沖積段丘・低地の一般面A(氾濫原)・低地の一般面B(三角州・ラグーン)・低地の微高地・旧河道・海岸の砂堆の微地形に分類される。

山地は、大阪平野と紀ノ川河谷を分断する和泉山脈で、遺跡付近では東西方向にはほぼ直線の崖をなしている。これは、中央構造線活断層系の活動によるものと考えられている<sup>(2)</sup>。また、それと関連して和泉山脈の分水界は著しく南偏しており、南流する河川は集水面積が極めて狭い。

山地と低地が接する所には、一般的には山麓緩斜面や扇状地が形成されるが、この付近で最も幅広い谷である大年川の谷頭に暗示的な扇状地が存在する他に<sup>(3)</sup>顕著なものは認められない。そして、この扇状地を被覆して100m程の幅の段丘化した面が和泉山脈に付着している。これが日下氏のいう沖積段丘であり、木ノ本釜山遺跡の立地する面である。また、後述されるようにこの地形面上には濃厚に遺物の散布が認められることが注目される。

沖積段丘から約1mの崖を下って広がるのが、低地の一般面B(三角州・ラグーン)に分類される地形面である。この面は標高が2m以下であり、榎原の集落以南は0mに近い極めて低湿な面である。現在盛土による宅地化が進みつつあるが、全域が水田として利用され、掘上田という特異な景観が見られる。

紀ノ川の旧河道のひとつと考えられる土入川以東は、自然堤防状の微高地と旧河道の認められる地形面で、低地の一般面A(氾濫原)に分類され、海岸線には砂堆が形成されている。

以上の低地の一般面A・Bには、条里型土地割が存在することが知られる。服部昌之氏の復原によると図に示す通り3か所に分散して存在している。これらは方位を異にしており、全域に地割が施行されたのではないようである。条里との関連は不明であるが、7世紀後半と8世紀半ばに、この付近が墾田地として大安寺に納賜されたことが知られ、<sup>(4)</sup>当代のこの付近は開墾可能な土地条件であったようである。<sup>(5)</sup>

最後に、低地の一般面Bは、紀ノ川の堆積作用から取り残された窪地(ラグーン)と考えられるが、近年、古墳と、港としてのラグーンの位置関係が指摘されている<sup>(6)</sup>。当地でも木ノ本古墳群との関連で注目されるが、土地開発史との関係からも今後十分な検討の必要がある。(木下晴一)

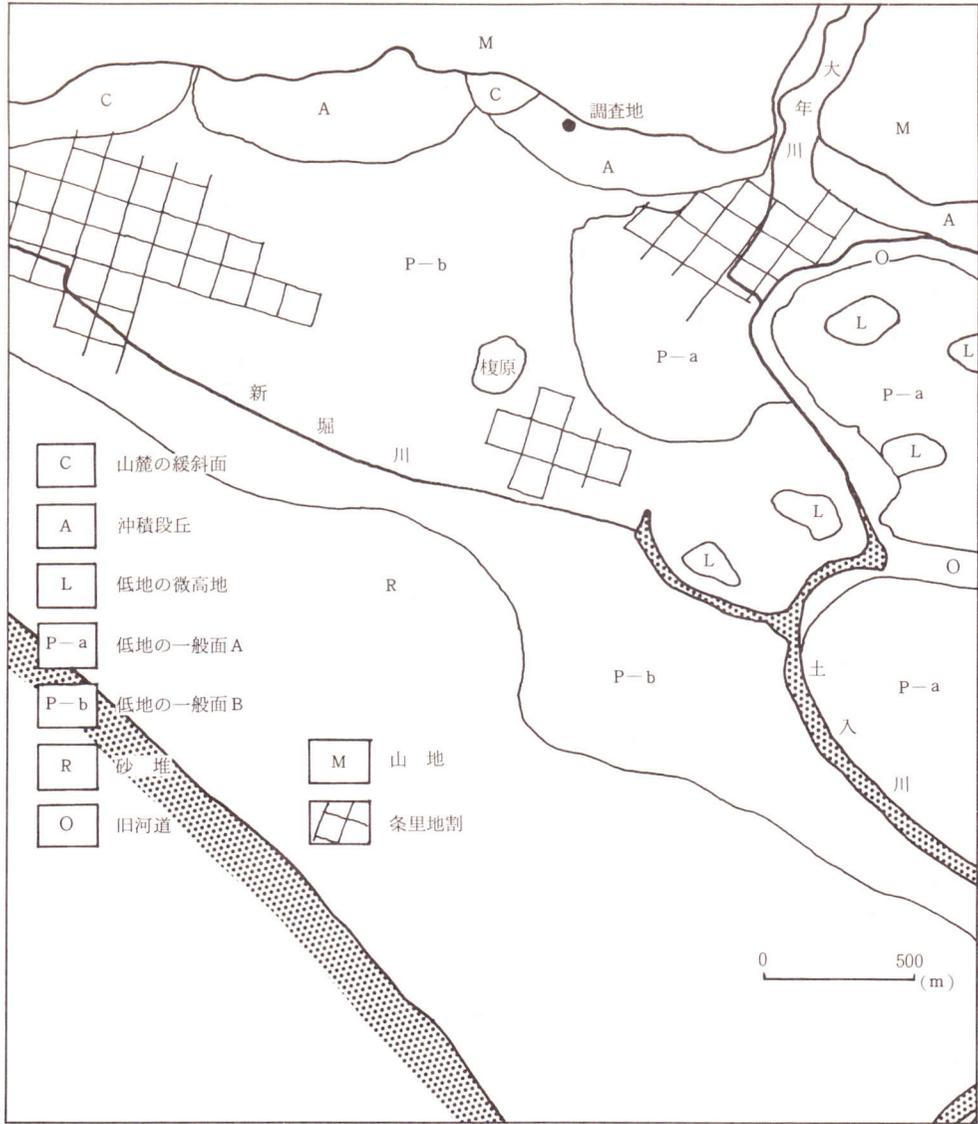


図2 遺跡周辺の地理的環境（地形分類は日下雅義、条里復元は服部昌之による）

- 註（1）日下雅義「紀ノ川の河道と海岸線の変化」『歴史時代の地形環境』古今書院 1980年 など  
 （2）岡田篤正・寒川旭「和泉山脈南麓域における中央構造線の断層変位地形と断層運動」『地理学評論』51-5 1978年  
 （3）国土地理院 空中写真 KK-61-9. C 6 A-8, 9では、大年川谷頭を中心に扇形に色調が他に比べ白く写る部分があたる。  
 （4）服部昌之「太田・黒田地域の歴史地理的環境」『和歌山後太田・黒田地域総合調査 地理・歴史調査概報』和歌山市教育委員会ほか 1974年  
 （5）「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」『大日本古文書』（編年）二  
 （6）森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代3』中央公論社 1986年

## 2. 歴史的環境（図3）

### （1）旧石器・縄文時代

現在、和歌山市内において旧石器時代に遡る遺物が確認される遺跡として、紀ノ川支流の貴志川流域の山東大池遺跡<sup>(1)</sup>があげられる。ここでは、ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器等のやまとまつた資料が採集されている。その他、紀ノ川北岸の西庄遺跡や鳴滝遺跡、南岸の総綱寺谷遺跡<sup>(2)</sup>等でナイフ形石器が、同じく左岸の鳴神遺跡<sup>(3)</sup>で有舌尖頭器が出土・採集されている。しかし、それらは明確な層位に基づいて出土した資料ではなく、その実態の究明は今後の課題とされるところである。

縄文時代の遺跡としては、紀ノ川右岸の直川遺跡<sup>(4)</sup>（中～後期）、左岸では瀬宜貝塚<sup>(5)</sup>（早～後期）・鳴神貝塚<sup>(6)</sup>（前～晩期）・岡崎遺跡<sup>(7)</sup>（後～晩期）、和田川流域の和田盆地最奥部の吉礼貝塚<sup>(8)</sup>（前～後期）が著名である。このうち、直川遺跡以外の遺跡はいずれも貝塚を伴っており、貝塚を形成することの少ないこの地方において、特色ある地域となっている。このことは、紀ノ川を中心とする河川の沖積作用によって海岸に多大の砂が堆積し、貝類の生育が好条件であったであろうことも無関係ではあるまい。紀ノ川と和田川の沖積作用は、各遺跡の消長とも係る。すでに先学によって指摘<sup>(9)</sup>されているので詳細は省くが、紀ノ川の河口は前期では瀬宜貝塚付近にあり、それが河川の沖積作用の進行に伴って晩期までには鳴神貝塚付近まで移動する。これに対し岡崎遺跡では、その存続時期の間に紀ノ川河口にのぞむ時期はなく、臨海性の強い遺跡に終始する。また、和田川流域の吉礼貝塚については、当時の和田川河口に形成された貝塚であるが、和田川の沖積作用が紀ノ川に較べて弱いため、吉礼貝塚は長期にわたって河口位置を占めていたと考えられている。いずれにせよこれらの遺跡は、途中盛衰をはさみながらも長期にわたって営まれており、当地方の他遺跡より相対的に安定した生活を送っていたとも考えられる。なお鳴神貝塚からは、抜歯を施した女性の伸展葬人骨が発見<sup>(10)</sup>されている。

加太周辺においても、大谷川遺跡<sup>(11)</sup>（後期）や紀淡海峡に浮かぶ友ヶ島（地ノ島・沖ノ島・神島）に所在する神島遺跡<sup>(12)</sup>（中～後期）等でも縄文土器が発見されている。これらの諸遺跡は、和泉山脈<sup>(13)</sup>をはさんで北側に所在する大阪府岬町の淡輪遺跡<sup>(13)</sup>等の大阪府側の遺跡との関係も注意する必要があるろう。

### （2）弥生時代

弥生時代へ入る頃にも、紀ノ川の沖積作用はさらに進行していた。こうした中、河口南岸の岩橋丘陵西側の沖積平野には、県下最大の弥生遺跡である太田・黒田遺跡が形成された。この遺跡での弥生時代前期の土器については、ヘラ描き直線文を施した第Ⅰ様式中段階のいわゆる「遠賀川式」系統の壺・甕とともに縄文時代晩期の突帯文土器の系統を引くと考えられる深鉢、いわゆる「太田式<sup>(14)</sup>（紀伊型）甕」が共伴することが注目された。これは、当地域では縄文時代晩期末と弥生時代前

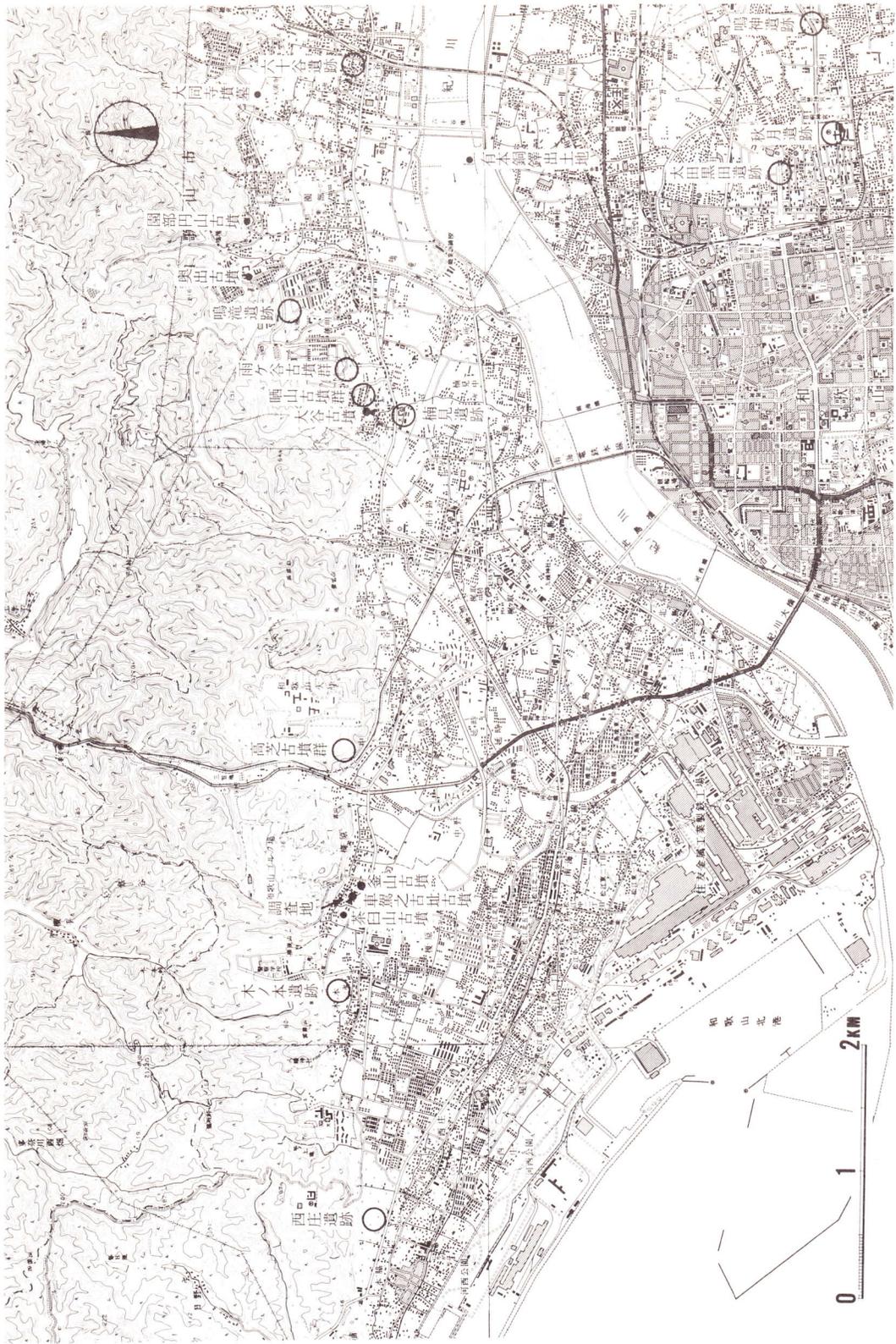


図3 調査地周辺遺跡分布図 S = 1 / 50000

期中葉の段階が併行していると考えられたが、このことは最近の白浜町瀬戸遺跡<sup>(15)</sup>や海南市亀川遺跡<sup>(16)</sup>の調査でも追認されている。この太田・黒田遺跡の他に前期の遺物を出土する遺跡としては、神前遺跡<sup>(17)</sup>・鳴神貝塚<sup>(18)</sup>・楠見遺跡<sup>(19)</sup>等が知られる。

中期では、太田・黒田遺跡<sup>(20)</sup>が相変わらず活発な活動を続ける他、紀ノ川河口域よりは遡った南岸内陸部に北田井遺跡<sup>(21)</sup>や宇多森遺跡<sup>(22)</sup>等が形成される。両遺跡とも、後期へも連続する遺跡であり、相当数の住居址が検出されている。

後期には、太田・黒田遺跡<sup>(23)</sup>では遺構・遺物は見られなくなるが、遺跡数は増加する。西庄遺跡<sup>(24)</sup>や井辺遺跡<sup>(25)</sup>といった平地部の遺跡の他に、橘谷遺跡<sup>(26)</sup>・天王塚遺跡<sup>(27)</sup>・滝ヶ峯遺跡<sup>(28)</sup>等の高地性集落が形成され、瀬戸内に至る高地性集落の分布圏内に当地域も組み込まれる。

また、和歌山市域においては6ヶ所もの銅鐸<sup>(29)</sup>出土地があり、濃密な分布を示す。このうち、砂山鐸<sup>(27)</sup>(突線紐式)と有本鐸<sup>(28)</sup>(扁平紐式)は紀ノ川中洲または川岸といった集落からやや離れたところから発見されたのに対し、橘谷鐸<sup>(29)</sup>(扁平紐式)・太田・黒田鐸<sup>(30)</sup>(外縁付紐式)・宇多森鐸<sup>(31)</sup>(不明)は集落址もしくはその近辺で発見されたものである。もう一つの吉里鐸<sup>(32)</sup>(扁平紐式)は、和田川を見下す標高約40mの山腹で発見された。

弥生時代後期はまたこの地で土器製塩が開始された時期でもある。和歌山市域ではまとまった遺構からの出土は少ないが、瀬戸内海をはさむかなり広い範囲を「備讃瀬戸地域」と呼ぶ<sup>(33)</sup>のと同様にやや大きく「紀淡海峡地域」をみた場合には大阪府岬町小島東遺跡などで「脚台Ⅰ式」と呼ばれる製塩土器が出土しており<sup>(34)</sup>、「備讃瀬戸地域」よりやや遅れて土器製塩がこの地域に導入されたといえることができる。

### (3) 古墳時代

古墳時代前期の遺跡としては、紀ノ川南岸では鳴神地区遺跡<sup>(35)</sup>、大日山Ⅰ遺跡<sup>(36)</sup>で、住居址や灌漑用水路と考えられる溝やそれに伴う祭祀遺構が調査されている他、秋月遺跡<sup>(37)</sup>では古式土師器を伴う前方後円形周溝墓が検出されている。紀ノ川北岸では吉田遺跡<sup>(38)</sup>、北田井遺跡<sup>(39)</sup>で数多い住居址が調査されている他、西庄地区遺跡<sup>(39)</sup>でも住居址四棟が検出されている。以上のように集落の調査例が比較的多いのに対して墳墓の実態は未だ不明確で、今後の調査に待つところが大きい。

さて古墳時代中期になると紀ノ川北岸では晒山古墳群<sup>(40)</sup>が、南岸では岩橋千塚古墳群<sup>(41)</sup>の花山支群がそれぞれ造営を開始する。晒山古墳群では5世紀前半に1号墳(造出付円墳 全長25m)が造られ、5世紀中頃には2号墳(前方後円墳 全長30m 粘土槨)が造営される。一方花山支群では5世紀前半に2号墳(前方後円墳 全長67m)、8号墳(前方後円墳 全長52m)、44号墳(前方後円墳 全長30m 粘土槨)が造られ、5世紀中頃に10号墳<sup>(42)</sup>(前方後円墳 全長44m)、20号墳<sup>(43)</sup>(前方後円墳 全長35m)が築かれたと考えられている。以後両者とも6世紀代の横穴式石室を内部主体とする前方後円墳まで順次造営が続けられる。また両古墳群とも立地条件は共通しており、丘陵頂部

に累代的に古墳を築造していった様子がうかがえる。

また、紀ノ川北岸、和歌山市木ノ本に位置する木ノ本古墳群は、<sup>(44)</sup>径40mの円墳釜山古墳、今回調査を実施した前方後円墳の車駕之古址古墳、前方後円墳と伝えられる茶臼山古墳から成る。いずれも不明な点が多いが五世紀代に形成された古墳群と考えられている。平地に立地している点で、上記の二古墳群と異なる。

次に和歌山平野東部の貴志川流域でも五世紀中頃に罐子塚古墳（円墳 径40m）続いて丸山古墳（円墳 径40m）5世紀末頃に三昧塚古墳（円墳 径35m）が造営されると考えられており、この地域の累代的な首長墓とされている。<sup>(45)</sup>これらの古墳の特徴はいずれも円墳であること、河岸段丘上の平坦地に立地していることが挙げられる。

このように古墳時代中期には平野の各地に様々な古墳群が造営を開始するが、これらの古墳群を考える上で看過することのできない古墳群が、和泉山脈を越えた大阪府泉南郡岬町淡輪の地域に存在する。5世紀前半の築造とみられる西陵古墳<sup>(46)</sup>（前方後円墳 全長210m）5世紀中頃～後半の年代が与えられている淡輪にさんざい古墳<sup>(47)</sup>（前方後円墳 全長200m）、西小山古墳<sup>(48)</sup>（造出付円墳 径40m）の3基である。西小山古墳は2基の前方後円墳のほぼ中間に位置し、内部主体の竪穴式石室には短甲、挂甲、鉄地金銅張輪鏝など豊富な副葬品が納められていた。

さて次に、古墳時代中期の集落址等についてみると、紀ノ川南岸では音浦遺跡や大日山Ⅰ遺跡で竪穴式住居址掘立柱建物が検出されている。また音浦遺跡には古式須恵器を伴い竈を有する住居址が存在し注目される。一方、紀ノ川北岸ではまとまった集落址の調査例はないが、昭和57年に調査された鳴滝遺跡<sup>(50)</sup>では倉庫群と考えられる7棟の大型の掘立柱建物が検出され、注目を集めている。また、この鳴滝遺跡や楠見遺跡<sup>(51)</sup>、六十谷遺跡<sup>(52)</sup>で特殊な陶質土器が出土しており、渡来人との交渉が想定されている。

5世紀末乃至6世紀初頭になると、紀ノ川北岸の晒山古墳群内に大陸色豊かな副葬品を持つ大谷古墳<sup>(53)</sup>が築造される。大谷古墳は全長67mの前方後円墳で家形石棺を直葬している。棺の内外から馬冑、馬甲をはじめとした豪壮な馬具類、短甲、四葉形飾金具、銚板、垂飾付耳飾など豊富な副葬品が検出された。大谷古墳の築造と相前後して、紀ノ川南岸の岩橋千塚では花山6号墳、大谷山6号墳<sup>(54)</sup>などの前方後円墳に横穴式石室が導入される。この後岩橋千塚では、6世紀後半にかけて大谷山地区、大日山地区、前山地区、井辺前山地区にまたがって横穴式石室を内部主体とする前方後円墳が順次築造されてゆく。規模の大きなものを列挙すると井辺八幡山古墳<sup>(55)</sup>（88m）天王塚古墳（86m）大谷山22号墳（80m）大日山35号墳（73m）となる。これらの古墳の規模は、紀伊では最大級に属し、畿内各地の後期前方後円墳と比較してもかなり大きな部類に入る。

和歌山平野とその周辺部の後期古墳には結晶片岩を小口積みにし、玄門部を内側に突出させた特殊な構造の横穴式石室が数多く分布している。岩橋千塚では横穴式石室を持つ古墳のすべてがこのタイプの石室を採用しており「岩橋型」とも呼ばれている。<sup>(56)</sup>このタイプの石室には奥壁に石柵を付

設するものが多く、中には石梁を有するものもある。紀ノ川北岸の晒山古墳群でも、6世紀前半になるとこのタイプの横穴式石室を持つ前方後円墳の背見山古墳<sup>(57)</sup>(10号墳)が造営される。5世紀代に大型円墳を累代的に築いてきた貴志川流域でも6世紀前半には双子三昧塚古墳(全長42m)や平池1号墳(全長28m)といった前方後円墳が築かれるようになる<sup>(58)</sup>。このように6世紀前半における和歌山平野各地の首長墓には一様に前方後円墳が採用されるという特徴がみられる。またこの時期には紀ノ川南岸で砂羅谷窯址群<sup>(59)</sup>が操業を開始し須恵器を生産しはじめる他、埴輪専業窯と考えられる森小手穂窯址<sup>(60)</sup>の存在が知られる。

6世紀代は全国各地で爆発的な群集墳の造営の始まる時代である。和歌山平野でも紀ノ川南岸の岩橋千塚古墳群で横穴式石室や竪穴式石室、箱式石棺を内部主体とする500基にも及ぶ大群集墳が形成される。また岩橋千塚の東に連なる明楽山塊にも、寺山古墳群、東国山古墳群、明楽古墳群、小倉古墳群、七ツ塚古墳群、具束壺古墳群などの群集墳が造営される。また貴志川流域でも高尾山古墳群や北古墳群といった群集墳が出現する。これらの古墳群はおおむね岩橋型の横穴式石室を内部主体とするが、高尾山古墳群のように竪穴式石室墳と混在するもの、東国山古墳群のように竪穴式石室を中心に構成されるものなど様々である。また寺山古墳群や具束壺古墳群では岩橋千塚と異なって蛇紋岩の自然石を積み上げた横穴式石室を構築している。紀ノ川北岸でも雨ヶ谷古墳群や鳴滝古墳群といった群集墳が形成される。しかし群集墳の絶対数は南岸に比して大幅に少ない。この他単独に存在する奥出古墳や園部円山古墳では和泉砂岩の巨石を使用した横穴式石室墳が構築されている。

このように6世紀代に数多く造られた群集墳も6世紀末から7世紀前半頃にはほとんど造営されなくなる。この時期の大型古墳として注目される岩橋千塚の井辺1号墳は一辺40mの方墳で横穴式石室を内部主体とする。6世紀末～7世紀初頭の築造が考えられている。しかし7世紀前半になると際立った古墳の存在を認めることはできなくなり、紀ノ川南岸では岩橋千塚寺内地区の7世紀前半、紀ノ川北岸では高芝1号墳<sup>(61)</sup>の7世紀中頃をもって古墳の造営を終結し、和歌山平野における古墳時代は完全に終焉を迎えるのである。

一方、弥生時代後期頃に開始された土器製塩は、古墳時代に入り飛躍的に拡大する。弥生時代の項でも触れた岬町小島東遺跡では、古墳時代初頭に石組みの製塩炉が築造され、同じ岬町山田海岸遺跡でも脚台式製塩土器が伴う石組みの製塩炉<sup>(62)</sup>が検出された。和歌山市域においても、性格の明らかな遺構からではないものの、製塩土器の出土量は格段に多くなる。

古墳時代に入ると、奈良盆地や京都盆地などの内陸地の遺跡において、製塩土器の出土が顕著となる。それぞれの地域における集成状況<sup>(63)</sup>をみても、備讃瀬戸などの他地域のものも幾分含まれるが、紀淡海峡周辺地域からの搬入と考えられるものが大部分である。

以上のような情況から、古墳時代の土器製塩は支配機構の中に組み込まれ、集中的な操業がなされたものと理解できる。また、古墳の横穴式石室内に製塩土器が副葬される例<sup>(64)</sup>(御坊市秋葉山古墳)がみられるほか、祭祀遺物との共伴例<sup>(65)</sup>が顕著なことから、製塩土器の特殊性についての再検討を要

する資料も増加している。

#### (4) 歴史時代

歴史時代の遺物が出土する遺跡は古墳時代のそれと比べると、期間の長さには比して、その性格が明らかなものはあまり多くない。

奈良時代では、紀ノ川北岸地域に山口<sup>(66)</sup>、上野<sup>(67)</sup>の2カ所の寺跡が知られており、南岸地域には鳴神<sup>(68)</sup>Ⅱ遺跡、同Ⅴ遺跡<sup>(69)</sup>、音浦遺跡<sup>(70)</sup>、大日山Ⅰ遺跡<sup>(71)</sup>、太田・黒田遺跡<sup>(72)</sup>、大同寺墳墓<sup>(73)</sup>が知られている。

これらのうち山口廃寺には礎石がわずかに残っている以外に明確な遺構はないが、軒丸瓦が表採<sup>(74)</sup>されている。上野廃寺は薬師寺式の伽藍配置で、最近の調査で、東塔の基壇縁が塼積みであるのに対して、西塔のそれが瓦積みとなっており、規模の面でも東塔が西塔より優位であることが明らかとなった。これら以外にも瓦窯跡と推定される薬勝寺廃寺跡<sup>(75)</sup>があり、紀ノ川南岸の古寺跡への供給が想定されている。ここで取り上げた3カ所の寺院関連遺跡はいずれも奈良時代前期のものと考えられるが、仏教受容の様子はまだ明らかにはされていない。

鳴神Ⅱ遺跡では須恵器・土師器を伴う井戸が、鳴神Ⅴ遺跡では溝などが、太田・黒田遺跡では井戸や溝が検出されている。大日山Ⅰ遺跡では滑石製模造品などの特殊な遺物が出土しており、5世紀から11世紀にかけての湧水を対象にした祭祀の場であることが想定されている。大同寺墳墓ではその出土状況が明らかではないが、銅製骨蔵器と石櫃の蓋と身が出土している。

奈良時代の土器製塩の実態は、古墳時代に比べると明らかになっていない。しかし、内陸地においてこの地域のものと考えられる製塩土器の出土量が多いこと<sup>(76)</sup>や、平城宮跡出土の木簡の調塩の付け札として「紀伊國」のもの<sup>(77)</sup>の割合が多いことから、なお土器製塩が盛んであったことが推察できる。

平安時代には、太田・黒田遺跡、鳴神Ⅱ遺跡、同Ⅴ遺跡などからこの時期の溝や井戸などの遺構が検出されているが、遺跡全体の性格付けが確実にこなえるものはない。

鎌倉時代から室町時代にかけての主な遺跡としては、加太廃寺<sup>(78)</sup>と西庄遺跡<sup>(79)</sup>があげられる。

加太廃寺では明確な遺構を遺してはいないものの、「堂前」の小字名と表採された梵字瓦によって、その所在地と鎌倉期の建立が知られる。

木ノ本の隣接地域である西庄遺跡では、その発掘区の第Ⅰ地区から南北に走る大溝によって区画された掘立柱建物を中心とする、中世から近世に至る屋敷跡が検出された。さらにそのうちのA区から、東西25m南北15mの、石組み基壇をもち屋敷内において主屋と考えられる掘立柱建物が検出されているほか、掘立柱建物数棟と井戸数基が検出されている。遺物として、青磁・白磁など多数の輸入陶磁器が出土した。

近世の遺構が検出されている遺跡は数多いが、水田耕作などにより削平を受けているためにその全容が明らかなものは極めて少ない。太田・黒田遺跡では近世太田城の濠が検出されているが、中世初頭の掘削であることが推定されている。

発掘調査による以上のような成果の他に、種々の文献資料によって「木ノ本」の歴史の変遷を伺い知ることができるので、ここで概観しておく。

文献にみる「木ノ本」の初出は藤原宮跡出土の木簡である。第29次調査時に濠 S D 170から出土したもので、表に「紀伊國海<sup>(80)</sup>郡口里木本村宇手調」と書かれている。「郡」字表記や伴出遺物などから大宝元(701)年以降和銅三(710)年までのものと考えられる。

次の資料は天平十九(747)年付の「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」(『大日本古文書』(編年)2)である。天武二(673)年に同寺に施入された墾田として「紀伊国海部郡木本郷」所在の百七十町と、天平十六(744)年に施入された墾田として「紀伊国木本郷葦原」の五町がそれぞれの四至とともに記載されている。ここに記された「木本郷」は「和名抄」にはみられない郷名である。しかし、可耕地としてのこれらの土地は資財帳作成時には開田しておらず、大安寺の領地権はその権勢の衰えとともに薄れていったことが推察される。

このあと木ノ本の名は文献の記録からしばらく遠ざかり、平安時代の終わり頃に再び文献に登場する。

ここでの木ノ本は東大寺の末寺であった崇敬寺(現奈良県桜井市安倍文殊院)の所領の「紀伊国木本庄」である。この木本庄葦原田108町7歩は、その文章の内容から天永元(1110)年のものと考えられている、十二月十九日付の「崇敬寺別当頼慶請文」(『東大寺図書館所蔵未成巻文書』)によると、永承年間(1046~1053)中に国司定家の手によって五十余町、国司永綱・有政の在任中に三十余町、国司朝輓の在任中に二十余町の開発が行われたことがわかる。

この崇敬寺による開発と並行して、東大寺・崇敬寺側と三河守源有政とその子有雄(王)丸側との領有権争いが生じている。この間の経緯については、西尾虎之助が詳しく論じているのでごく簡単に記す。

その発端は、長治元(1104)年八月二日付の「崇敬寺別当頼慶請文」(『筒井寛聖氏所蔵東大寺文書』)によると、崇敬寺別当源等が荘文書を源氏方に預けたことにある。源氏方が崇敬寺方の荘文書返却請求を拒否し、荘年貢を押領を続けた。その後それぞれの言い分での争いが続き、それぞれから朝廷への訴えも出されている(『中右記』嘉承元(1106)年八月三日条、『増補史料大成』)。

この紛争の朝廷による裁定の結果は定かではないが、天永二(1111)年九月八日付の「木本荘検田目録注進状」(『東大寺文書』七(大日本古文書))にみる木本御庄の作田が七五町五段二百三十歩となっており、残りの三十余町が源氏方の領地となったことは大いに考えられることである。

東大寺関係の十三世紀代の資料によると、木本荘所職の譲与をめぐる争いが顕恵法印の弟子間で起こっているが、建保二(1214)年付の「東大寺領諸荘田数所当等注進状案」(『東大寺続要録』)には「木本庄、田数不能注進之」とあり、東大寺側の直接的な管理能力の衰えの傾向は伺える。

この時期には当荘を本処地とする木本氏の名が幾つかの文献資料にみられる。その初出は嘉禎四(1238)年付の「八条辻固湯浅御家人交名案」(『崎山家文書』)であり、湯浅党に属していたこと

が明らかである。また、正応二（1289）年付の「湯浅宗重跡結番注文」（『崎山家文書』）には、  
「十四番 木本東庄」と「十五番 同西庄」の記載があり、現在の西庄の地名の初出がみられる。<sup>(82)</sup>

南北朝期ごろの主な文献は『木本八幡宮文書』である。当文書によると、西暦1400年前後の比較的  
短期間に数度別の人物により木本西庄の地が寄進されており、地頭職が分割されていたことがわかる。

この木本八幡宮はその社伝によると、応神天皇・神功皇后・天照大神を祭神とし、神功皇后の三  
韓遠征からの帰還の際に頓宮となり欽明天皇の命により八幡宮を造営したという。文献上の記録で  
は、建徳二（1371）年付の「定実畠地讓状」（『木本八幡宮文書』）が正式な初出であるが、前掲の  
天永二（1111）年付の「木本莊検田目録注進状」の除田中の神田に「八幡三段」とあり、当宮に關  
連するものと思われ、その造営の実際も平安期に東大寺鎮守八幡を勧請されたと考えられている。  
現存の神殿は元和四（1618）年に建立されたもので、県指定文化財である。

木本庄の名称は江戸時代にも存続し、浅野幸長時代には木本村を（『慶長検地高目録』）、元和年  
間に徳川御三家の一つとなって以後は木本村、西庄村、榎原村、小屋村を併せて（『続紀伊国風土  
記』）、それぞれ呼称した。

明治二十二（1889）年に海部郡（明治二十九年には海草郡）に所属して、木本・榎原・小屋を合  
併して木ノ本村となり、昭和十七（1942）年以降は和歌山市の大字名となり、現在に至っている。

（穂積裕昌・藤川智之・田村悟）

- 註（1）山口卓也「和歌山市山東大池遺跡採集の旧石器・縄文時代の遺物」『古代史の研究』3 1981年  
（2）関西大学『和歌山市における古墳文化—晒山、総綱寺谷古墳群・楠見遺跡調査報告一』1968年  
（3）増田一裕「有舌尖頭器の再検討」『旧石器考古学』22 1981年  
（4）巽三郎・羯磨正信「和歌山県下の縄文式文化大観」『古代学研究』18 1958年  
（5）巽三郎『禰宜貝塚調査概報』和歌山市教育委員会 1971年  
（6）石部正志他「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』3 和歌山県教育委員会  
1968年  
（7）森浩一・藤井祐介『岡崎縄文遺跡発掘調査報告』和歌山市教育委員会 1965年  
（8）前掲註（4）  
（9）関西大学考古学研究室『岩橋千塚』和歌山市教育委員会 1967年  
（10）前掲註（4）  
（11）『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部文化学科 1968年  
（12）『和歌山県史 考古資料』和歌山県史編纂委員会編 1983年  
（13）『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・Ⅷ』大阪府教育委員会 1987年  
（14）森浩一ほか「シンボジウム・弥生式文化研究の諸問題」『古代学研究』61 1971年  
（15）『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 京都大学埋蔵文化財センター 1984年  
（16）『亀川遺跡Ⅴ』海南市教育委員会 1985年  
（17）前掲註（12）  
（18）前掲註（6）  
（19）前掲註（2）  
（20）前掲註（12）  
（21）『吉田・北田井遺跡第1次調査概報』和歌山県教育委員会 1970年

- 『北田井遺跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会 1971年
- (22) 『宇田森遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1968年  
『宇田森遺跡発掘調査概報2』和歌山県教育委員会 1969年
- (23) 前掲註(20)
- (24) 『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会 1979年
- (25) 森浩一ほか『井辺弥生式遺跡発掘調査報告』和歌山市教育委員会 1965年
- (26) 『滝ヶ峯遺跡発掘調査概報』和歌山市教育委員会 1972年
- (27) 前掲註(12)
- (28) 佐原真・町田章「和歌山市有本出土銅鐸」『和歌山県文化財学術調査報告書』3 和歌山県教育委員会 1968年
- (29) 田中敬忠「紀伊橋谷出土の袈裟襷文銅鐸」『和歌山市文化財現地調査記録』和歌山市教育委員会 1962年
- (30) 前掲註(20)
- (31) 前掲註(22)
- (32) 前掲註(12)
- (33) 山本恵「紀伊半島における製塩遺跡群の動向」(同志社大学大学院修士論文による)
- (34) 『岬町遺跡群発掘調査概要—小島東遺跡』1978年 大阪府教育委員会
- (35) 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1984年
- (36) 『近畿自動車道と和歌山線埋蔵文化財調査報告』和歌山県教育委員会文化財課 1972年
- (37) 『秋月遺跡現地説明会資料』和歌山県教育委員会 1985年
- (38) 前掲書(21)
- (39) 前掲書(24)
- (40) 前掲書(2)
- (41) 前掲書(9)
- (42) 関西大学考古学研究室『花山西部地区古墳』和歌山市教育委員会 1967年
- (43) 羯磨正信也『花山古墳』和歌山市教育委員会 1964年
- (44) 和歌山県『和歌山県史跡名勝天然記念物調査報告書9』1930年・前掲書(12)
- (45) 三宅正浩「紀伊における古墳時代中期の—様相」『求真能道』1988年
- (46) 梅原末治「泉南郡淡輪村古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第3輯』1932年 広瀬和雄他  
『西陵古墳発掘調査報告書第2集』岬町教育委員会 1978年
- (47) (46) 前文献 藤永正明・岸本道昭編『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会
- (48) 末永雅雄「淡輪村西小山古墳と其の遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第3輯』1932年  
藤永正明「西小山古墳」『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 1981年
- (49) 前掲書(36)
- (50) 前掲書(12)
- (51) 前掲書(2)
- (52) 後藤守一「須恵器家の新発見」『考古学雑誌』第17巻第12号 1927年
- (53) 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市教育委員会 1959年
- (54) 笠井保夫『大谷山4・5・6・39号墳発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1973年
- (55) 森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科 1972年
- (56) 前掲書(9)
- (57) 大野左千夫・大野嶺夫「背見山古墳発掘調査概要」『古代学研究85』1978年
- (58) 前掲書(45)
- (59) 河上邦彦・奥田豊「和歌山市吉礼砂羅之谷須恵器窯群調査報告」『関西大学考古学年報2』1968年  
中村浩「地方窯成立の一形態」『橘茂先生古稀記念論文集』1980年

- (60) 前掲書 (55)
- (61) 『和歌山大学移転総合地発掘調査報告書』和歌山県教育委員会、和歌山大学 1983年
- (62) 『現地説明会資料16 山田海岸遺跡発掘調査』財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1988年
- (63) 才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器」『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』東大阪市遺跡保護調査会 1980年  
 同「同Ⅱ」『財団法人 東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』財団法人 東大阪市文化財協会 1985年  
 岡崎晋明「内陸地における製塩土器—奈良盆地を中心として—」『橿原考古学研究所論集 第四』吉川弘文館 1979年  
 岩崎誠「乙訓地域出土の製塩土器」『京都考古』第43号 1986年
- (64) 『秋葉山古墳発掘調査報告書』御坊市埋蔵文化財調査報告書第1輯、御坊市教育委員会 1978年
- (65) 一例として布留遺跡布留(西小路)地区を挙げると、製塩土器が多量に検出された土壌及びその周辺から須恵器・土師器とともに、滑石製紡錘車、同双孔円板、同管玉、同白玉が出土している。(高野政昭「布留遺跡出土の古墳時代製塩土器」『天理大学学報』第百五十七輯 1988年。)
- (66) 前掲書 (12)
- (67) 『上野廃寺発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1986年
- (68) 前掲書 (12)
- (69) 前掲書 (35)
- (70) 前掲書 (36)
- (71) 前掲書 (36)  
 小賀直樹「和歌山県における祭祀遺跡」『和歌山の研究 第一巻 地質・考古編』清文堂出版 1979年
- (72) 前掲書 (12)  
 『太田黒田遺跡発掘調査 現地説明会資料』和歌山市教育委員会・(財)和歌山市文化体育振興事業団 1988年  
 『太田・黒田遺跡(黒田48番地内)説明会資料』和歌山市教育委員会 1988年
- (73) 前掲書 (12)
- (74) 『社会教育資料(30)和歌山市の文化財』和歌山市教育委員会 1967年、においては同じ字名内の谷廃寺が紹介されており、礎石が2個遺存していることが記されている。拓影が紹介されている瓦により奈良県法起寺瓦との関係が指摘されているが、谷廃寺の所在地が明らかでないことから山口廃寺との関わりは不詳である。
- (75) 前掲書 (12)
- (76) 山内紀嗣『布留遺跡出土の製塩土器Ⅰ』考古学調査研究報告9、埋蔵文化財天理教調査団 1984年  
 平城京左京三条四坊十二坪からも製塩土器の集積遺構が検出されている。(『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 1988年)
- (77) 『平城宮木簡一 解説』平城宮発掘調査報告V、奈良国立文化財研究所 1969年  
 『同二 解説』同Ⅷ 同 1974年  
 『同三 解説』奈良国立文化財研究所 1980年  
 『同四 解説』同 1986年
- (78) 前掲書 (12)
- (79) 『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会 1978年  
 『同Ⅱ』和歌山県教育委員会 1979年
- (80) 『藤原宮出土木簡(五)』奈良国立文化財研究所 1981年
- (81) 西尾虎之助「東大寺領紀伊國木本庄」『歴史と地理』29ノ2 1932年  
 (後に『莊園史の研究』下巻一 岩波書店 1956年に所収。)
- (82) ただし、前掲の「木本莊検田目録注進状」では、案主田と職事がそれぞれ「西分」と「東分」に分かたれており、「西庄」と「東庄」に対応するものと考えられる。

## 第4章 車駕之古址古墳の調査

### はじめに

本遺跡の調査と関連して、車駕之古址古墳の墳丘測量を実施した。当古墳については、従来測量図がないため、詳しいデータがなく様々な計測値が出されていた。今回は、その基礎資料を作成するためと、本遺跡と古墳との関係を明らかにするために、発掘調査と併行して1986年3月24日から3月27日まで4日間の日程で測量を実施した。尚、測量の前は雑木が生い茂っていたので、3月13日慰霊祭を行って、雑木を取り払った。調査は、平板測量で行い、25cmコンターで1/100の原図を作成した。

さらに、地主の坂本武男氏の御好意により後円部に隣接する水田中にトレンチを入れることができた。これによって、後円部の墳丘葺石を確認するとともに、中世以降の土層の堆積状況を明らかにすることができた。坂本氏の御協力に感謝したい。また、墳丘測量には、地主の坂本政雄氏・坂本岳博氏・芝田楠次郎氏・弘世憲次氏・坂下理一氏にも御協力を頂いた。ここに明記し、感謝の意を表す次第である。

### 1. 墳丘の現状

古墳は、紀ノ川北岸の低地に立地する。紀ノ川の河口付近の北岸部は幅約4kmの帯状の平地が広がり、北側は山地となっている。木ノ本は、河口から2km溯ったその山麓にある集落で、その集落の東のはずれに古墳が存在している。古墳は3基あって、東から釜山古墳（木ノ本1号墳）、その西北100mに今回調査実施の車駕之古址古墳（2号墳）、さらに西170mに茶臼山古墳（3号墳）が並び木ノ本古墳群を形成している。これら3基の古墳は、砂地に築かれ、砂で盛土されたもので、付近の海拔も3～4mと非常に低いところに立地している。

車駕之古址古墳は、周辺に宅地がせまり、また墳丘上が畑に利用されているため、また、砂で盛土されたこともあって墳丘の改変が著しいが、3基の中では比較的墳形・規模等がわかるものである。しかし、上記のような理由で、墳丘に対する認識にも変化が生じてきている。

まず、1930年の『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告九冊』の岩西忠一<sup>(1)</sup>の報告では釜山古墳と形状が異なるとした上で、周囲92間半（約168m）の楕円形であるとしている<sup>(2)</sup>。

一方、1983年の『和歌山県史・考古資料』では、後円部直径約20m、前方部長約26mの全長46mの前方後円墳であると報告している。

さらに、1984年藤井保夫は「松鶴洞1号墳と紀伊の前方後円墳<sup>(3)</sup>」の中で、全長約70mの前方後円墳であると認識している。

今回の測量では、上記のような所見に留意しつつ、調査地をも含めた周辺部の測量も実施した

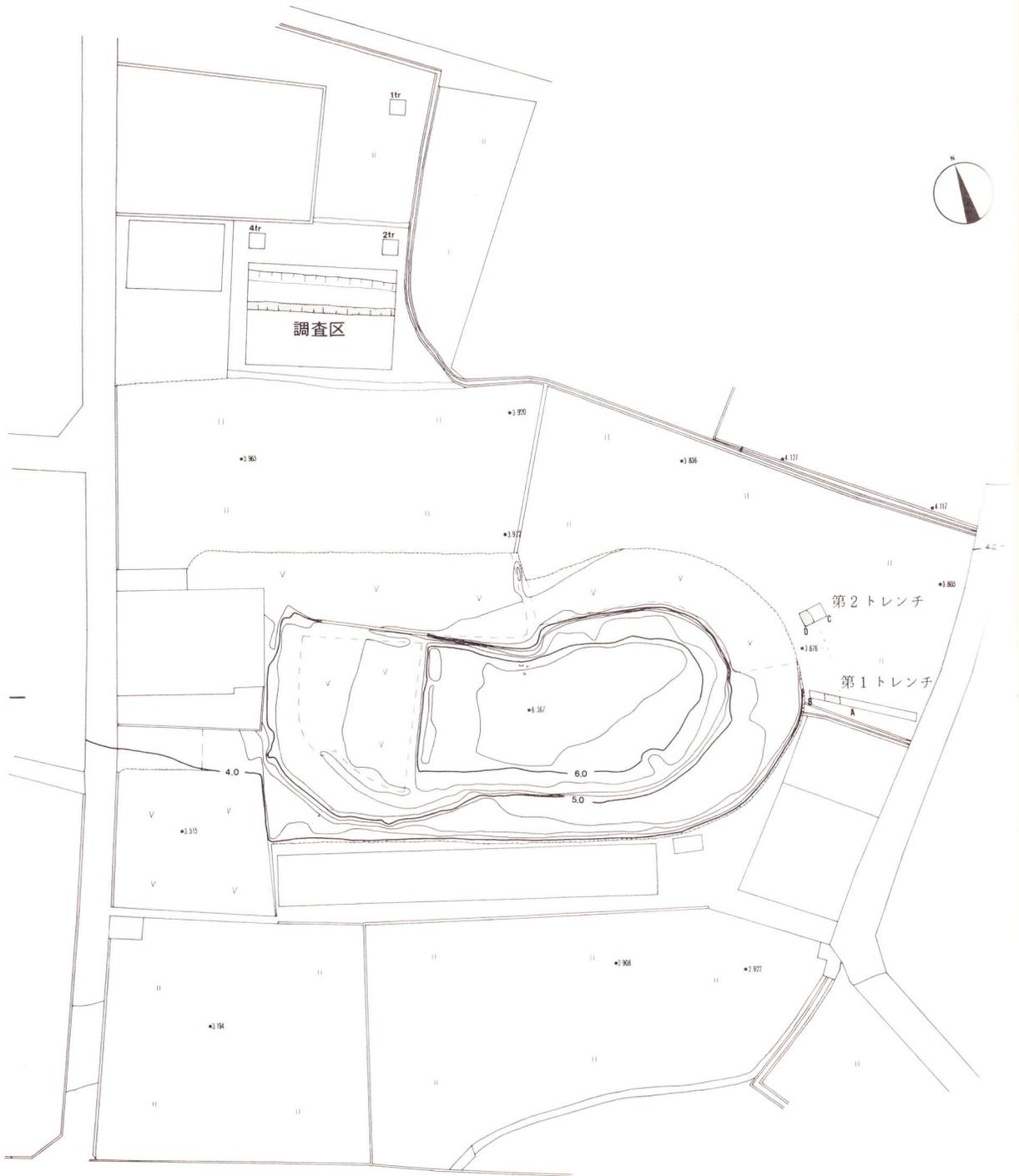


図18 車駕之古址古墳墳丘測量図 (S = 1 / 800)

(図18)。まず、その外形については、後円部を東にむけた前方後円墳と考えることができる。墳丘の周囲には高さ0.5m程の石垣があって、西側以外を囲んでいる(図版8)。そのうち、北東側にあたる部分がきれいな円弧状になっていて、ここはある程度後円部の旧状をとどめていると考えられる。一方、北西側及び南側の石垣は東西方向に直線となっていて、かなり墳丘に改変が加えられている。北側では、この石垣の上に畑がつけられ、現在も作物が植えられている。さらに、その畑の南側に高さ150cm程の盛土があってゆるやかな平地となっている。ここが墳頂部分にあたるが、標高4.00mのコンターは径26m程のいびつな楕円形をなしており、かなり削平をうけていることがわかる。このコンターの上は、平地地で、西よりの位置に標高6.367mの最高所がある。この墳頂部分もかつては畑であったらしく、畝のあとが残っている。この墳頂部分の北側には3点の緑泥片岩がある。そのうち長さ100cm、幅40cmを計る一点は墓石として利用されている(図版8)が、いつの時代にそれが祀られたのかはわからない。3点とも顕著な加工痕はみられず、古墳に直接伴うものであるかどうかはわからない。しかし、当古墳の位置する紀ノ川北岸では緑泥片岩を産出しないところから、南岸からの搬入品であると推定され、堅穴式石室の天井石材や箱式石棺の棺材などであった可能性もある。

一方、墳丘の南側には文化住宅が建てられている。この建物をつくる時に、古墳の南側は削られている。古墳の南側は殆んど旧状をとどめないと思われる。

さらに、前方部にあたる部分も、大幅に改変が加えられている。その中央部分は、現在畑となっていて、キャベツ等の作物が植えられている。また、その西側は材木置場があり、さらにその南も畑となっている。この周辺は、畑の開墾及び材木置場の造成で、旧状を復元することは極めて困難である。

古墳の周辺部に目を転じると、西側に南北方向の道路があって、また墳丘の南北両側に田一枚を挟んで畦畔が残り、それが東側に行くに従ってその幅が狭くなっていて、それが古墳の東側にある南北方向の道路に切られた形となっている。以上のような畦畔及び地割のあり方からして、旧来は盾形の整美な周濠を備えていたものと推測される。

## 2. 後円部隣接地点の調査

古墳の現状は以上のごとくであるが、前述のように後円部墳裾確認のためのトレンチを入れることによって本来の形状の一端をつかむことができた。

### (1) トレンチの設定

後円部東北の田に幅1m×14mのトレンチを一ヶ所、その北9mの位置に3m×2mのトレンチを一ヶ所設定した。南側のものを第1トレンチ、北側のものを第2トレンチと呼ぶことにする。

### (2) 層序(図19)

層序は基本的に7層あって、I層が表土、II層が床土、III層が暗灰黄色の砂質土層、IV層が黄灰

褐色の砂質土層で、ここまでは第1・第2トレンチの1～4に共通している。V層にあたるのが、第1トレンチの5、第2トレンチの8～11で、黄灰褐色の砂質土を基本に何回かの切り合いが認められる。VI層は第1トレンチの6で、褐色の砂質土、VII層は第1トレンチの7で灰黄褐色の粘質土層である。これらは、ほぼ水平に堆積していて、IV～VII層の間に東播系捏鉢・白磁・青磁などの中世遺物と埴輪片を包含している。

(3) 遺構 (図20)

V層の下面、GL-1.5m程のところでは葺石を検出した。石は灰黄褐色の砂質土の上にまばらに貼付いていて、その上面に埴輪片がところどころにみられる。石は、両トレンチとも標高2.0m付近に集中するが、2.5mより上にはつづかず、V層で切られた形となっている。

(4) 遺物 (図21～22)

埴輪片と土器類がある。埴輪については第3章及び表1～表7を参照されたい。土器類としては、青白磁・須恵器・東播系捏鉢・瓦器・瓦等の8世紀から16世紀にまたがる遺物が出土しているが、いずれも細片で図化することはできなかった。

(5) まとめ

第1トレンチ・第2トレンチで検出した石は、それが古墳の旧状をとどめるとされる石垣に沿っ

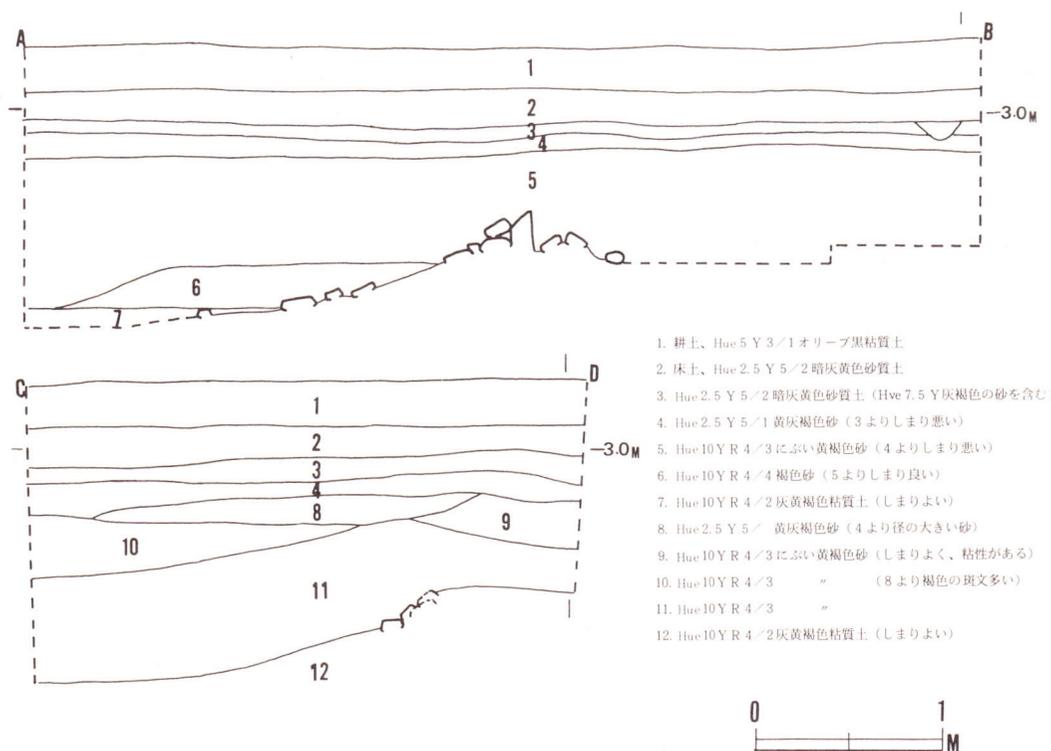


図19 車駕之古址古墳第1トレンチ(上)、第2トレンチ(下)土層断面図 S = 1 / 40

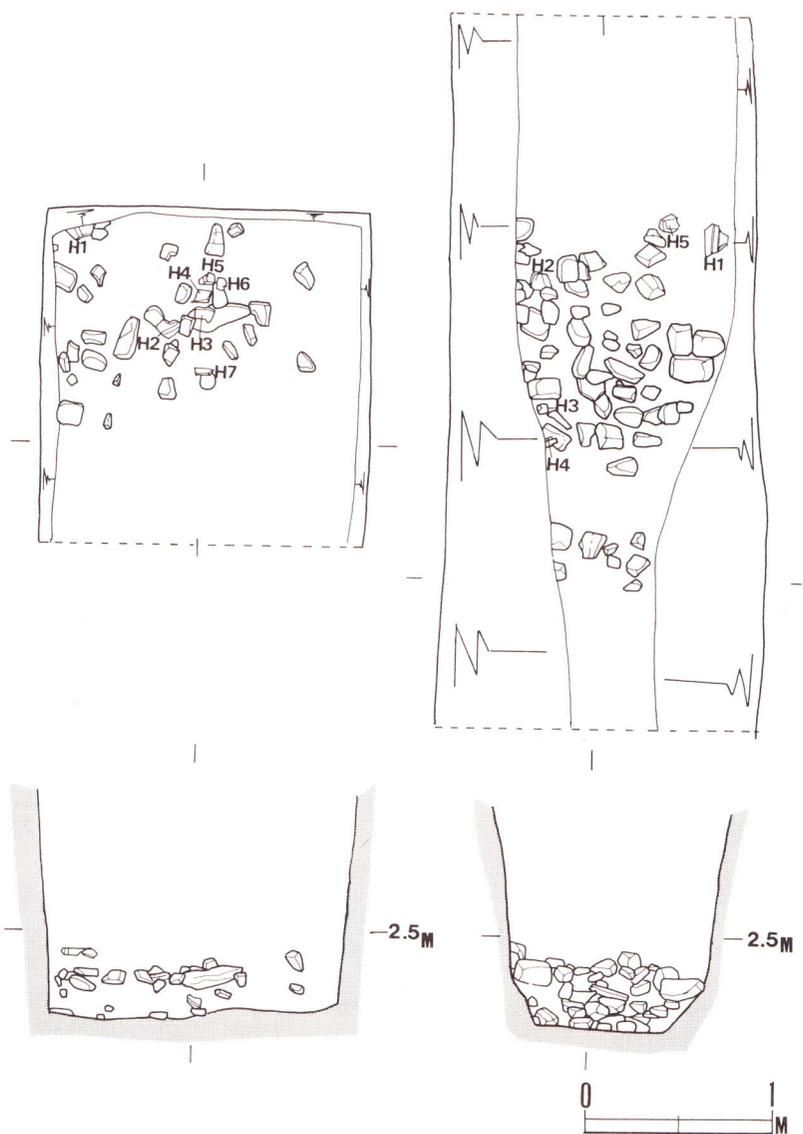


図20 車駕之古址古墳第1トレンチ(上)、第2トレンチ(下)平面図 S=1/40

て検出されたことから、墳丘葺石の残骸であることは間違いがないと思われる。それが中世遺物を含むV層によって削平されているところから、中世のある段階に墳丘が削りとられ、その後I～V層の堆積が行なわれたことがわかる。中世までに改変をうけて葺石の状況はかなりまばらになっている上、埴輪も本来の位置を保ったものはないが、石が検出された付近が埴裾であるとみてよいだろう。そうした場合、後円部は先に旧状をとどめていると推定した石垣から5 m離れて埴裾がまわることになる。その円弧をもとに後円部の直径を復元すると、径50 mとなる。

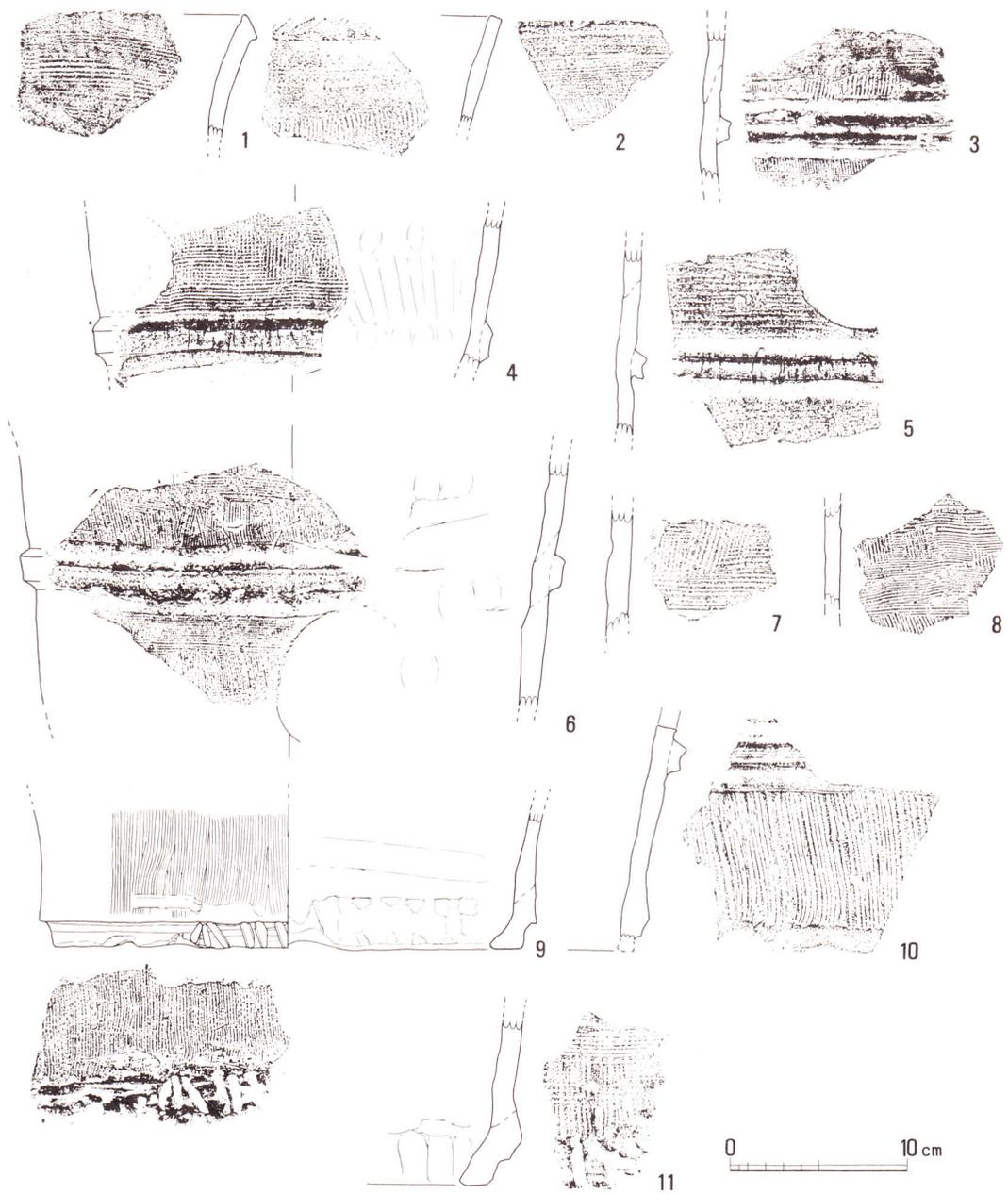


図21 車駕之古址古墳第1トレンチ出土埴輪 S = 1 / 4

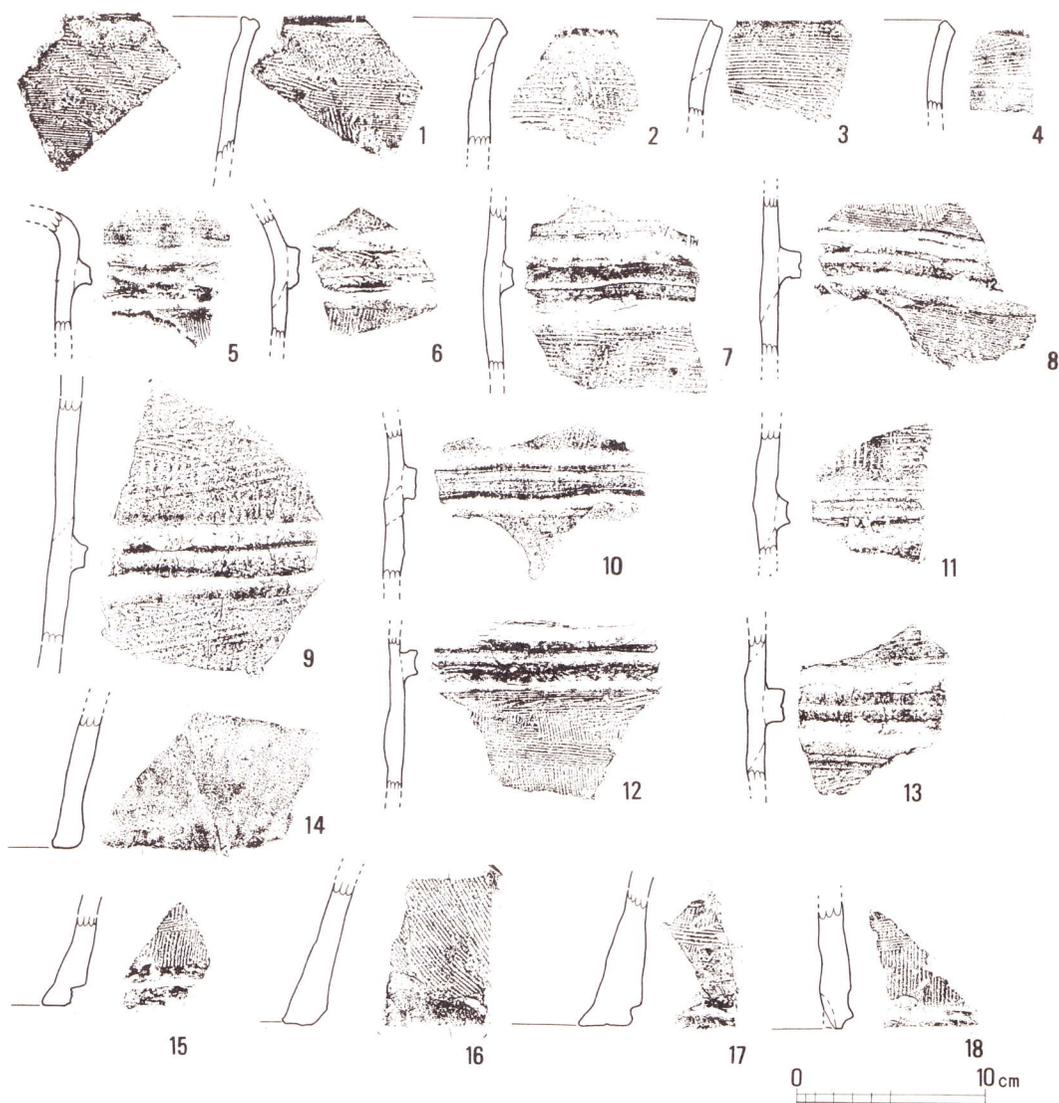


図22 車駕之古址古墳第2 トレンチ出土埴輪 S = 1 / 4

### 3. 墳丘の規模

後円部については上記のように推定したが前方部側は発掘調査を行っていない上、墳裾部を地上げて材木置場を造成しているため前方部の墳端を認定することは極めて困難である。

ところで、1953年撮影の空中写真では、上記の材木置場がまだ建築されておらず、造成前の状況を知ることができる。それと測量図をつきあわせて検討すると、その当時の前方部墳端は、測量図のほぼ4.0mラインにおくことができる。従って、材木置場の周囲の4.0mから4.75mのコンターが乱れているのは、材木置場造成の際に地上げされた盛土のためと考えることができる。この4.0

mラインを前方部墳端として、発掘された後円部墳裾からの全長を測ると72mとなる。しかしこの前方部墳端は、昭和28年当時地表面で観察されたもので、築造当初の墳裾は後円部と同様に長年の堆積作用で埋もれていると考えられる。後円部の発掘結果を勘案して5m分程、埋もれているとした場合、全長は77mとなる。ここでは、その誤差を計算に入れて、全長約75～80mであると報告しておく。

さらに、前方部の幅の数値については、判断材料が殆んどないが、現状で38mを測り、後円部と同様の残存状況を示していると考えた場合、長さ50mかややそれを上回る数値となる。

また、現存高は、後円部で北側の水田面から約2.5mを測る。さらに墳裾から現在の墳丘最高所までの高さは約3.5mである。

以上の検討から、古墳各部の計測値を掲げると次のようになる。

全長約80m、後円部径約50m、前方部長約30m、前方部幅約50m、高さ3.5m以上。

(坂 靖・田村悟)

註(1) 岩西忠一「木ノ本古墳」(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第九冊)1930年

(2) 和歌山県史編纂委員会編『和歌山県史・考古資料』1983年

(3) 藤井保夫「松鶴洞1号墳と紀伊の前方後円墳」(森浩一編『韓国の前方後円墳』社会思想社)1984年

## 第5章 遺構・遺物の検討

### 1. 遺物の摩耗度からみた遺跡の形成過程

#### 1. 各遺構と遺物包含層の年代

ここでは近世以降に形成されたⅠ～Ⅲ層より下位の包含層と遺構について述べることにする。まず、今回調査において遺物包含層としては最下層として検出したⅤ層についてである。包含されていた遺物の歴年代は12世紀前半（瓦器・玉縁白磁）と13世紀前半から14世紀前半（瓦器・劃花文青磁碗・東播系捏鉢・無文青磁碗・口禿白磁皿）の2群に分かれる。続くⅣ層出土遺物の歴年代は13世紀代から16世紀代（瓦器・端反白磁碗）とかなりの幅をもつ。

遺構については、Ⅵ層上面で検出された土坑群と大溝上・下層がある。Ⅴ層上面土坑群出土遺物の歴年代は13世紀前半から14世紀前半（瓦器）であり短期間である。大溝上層出土遺物の歴年代は12世紀初め（瓦器）と14世紀後半から16世紀半ば（稜花青磁皿・蓮弁文青磁碗）の2群に分かれる。大溝下層出土遺物の歴年代は13世紀前半から13世紀半ば（瓦器・東播系捏鉢）であり非常に短期間である。以上をまとめるとここに掲載した表のようになる。

この表より理解できることは大溝下層とⅤ層土坑群が一括性の高い安定した遺構といえる。反対にⅤ・Ⅳ層、大溝土層は遺物の年代に群を形成したり、長い幅をもったりして一括性の低い不安定な状態と考えられる。

年代	12C	13C	14C	15C	16C
Ⅳ層			.....		
大溝 上層	.....				.....
大溝 下層		———			
Ⅴ層土坑群		———			
Ⅴ層	.....	.....			

表10 各層の年代

#### 2. 遺跡形成について

前節では遺物の年代による遺構・包含層の形成年代を整理してきた。その中で各遺構、遺物包含層に性格の相異を明示することができた。しかし、遺跡が形成される過程を知ることはできなかった。この節では、各包含層から出土している円筒埴輪片を資料として遺跡形成の状況を分析する。

##### 2-1 分析の目的と着眼点

遺物包含層・遺構検出面・層理という遺跡形成を考える上で要点となる事項に関しては、従来より、伴出する遺物の型式学的研究による年代（時間）の追求という側面から多く考察されてきた。本遺跡においても同様な視点での考察は可能であるが遺跡形成の過程を知るうえでは万全といえなかった。そこで、遺物が包含された時の状態を観察することによって、その時の状況を復元し、より細かに遺跡形成過程が推定できると考えた。具体的には、形態が単純で各層・各地区に包含され計数処理に適した円筒埴輪について、その破片数・1破片当たりの重量と後述する接合回数・摩耗度を計測・判定した数値をグラフ化し基礎資料とすることであった。

##### 3-2 対象資料とグラフについて

対象となる発掘区は、A・B区についてはⅡ層～Ⅴ層、C・D区はⅡ層～Ⅳ層・大溝上層と下層、

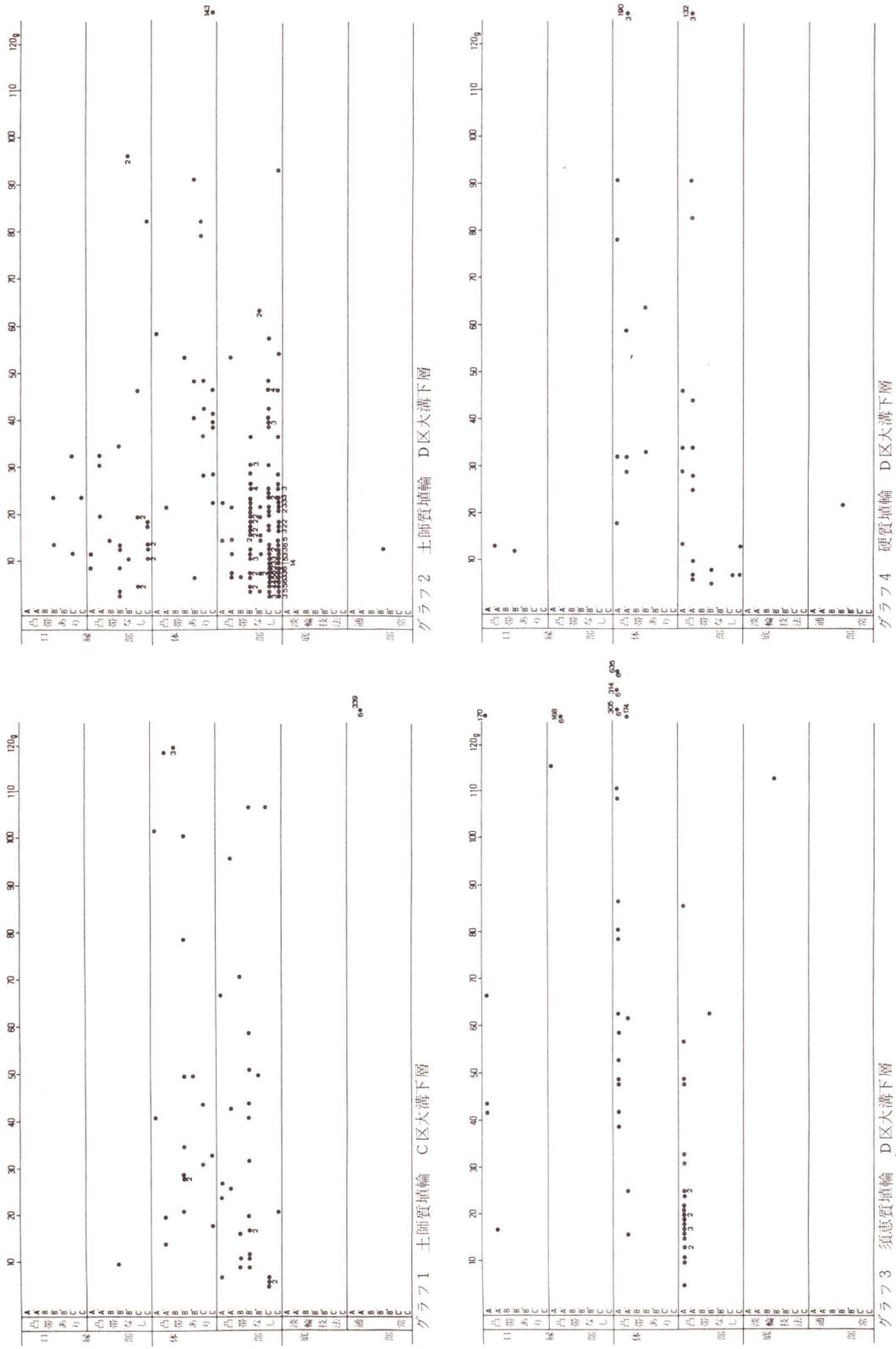


図23 遺物の摩耗度と重さの関係(1)

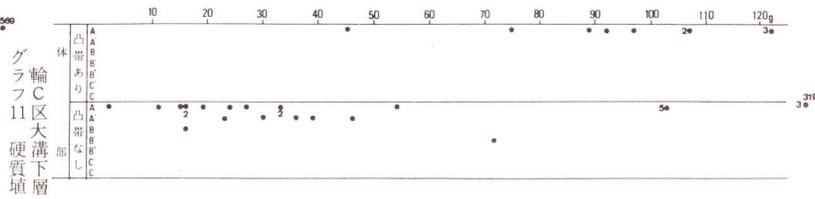
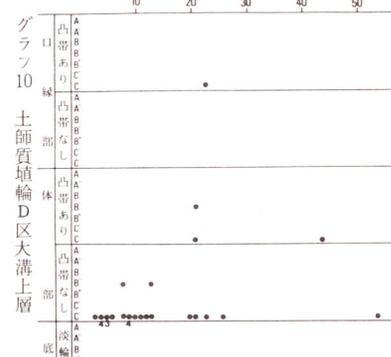
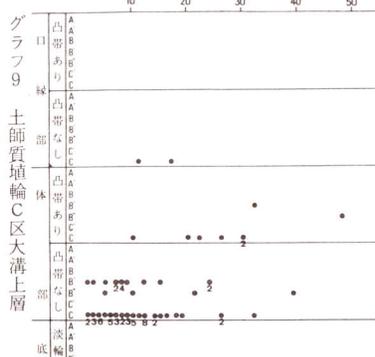
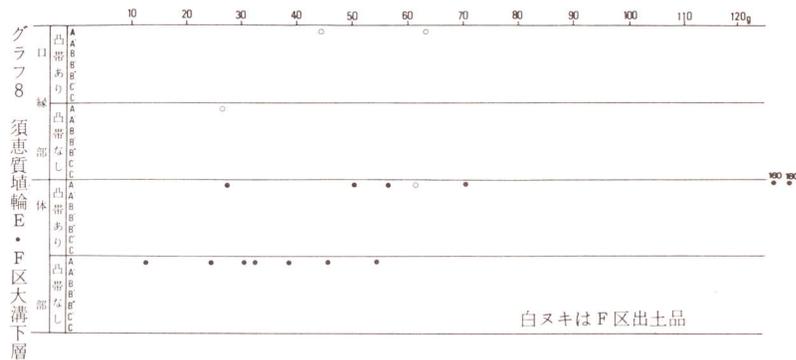
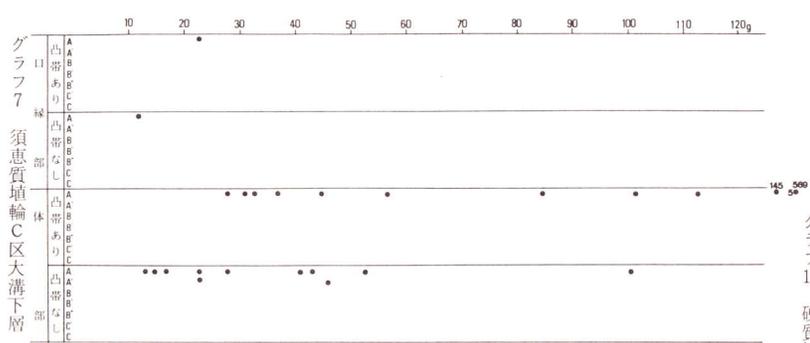
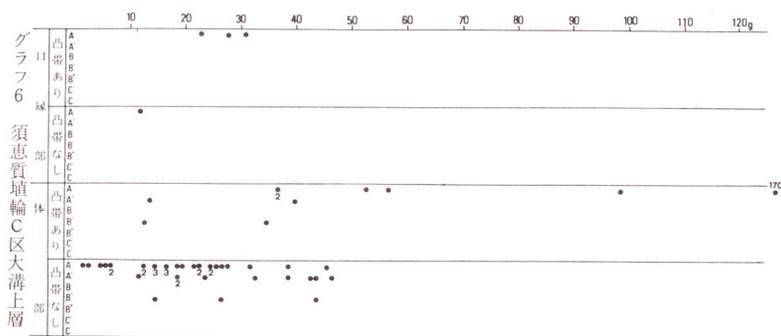
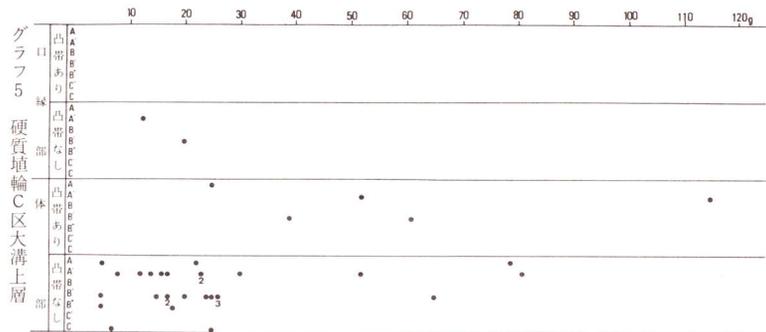
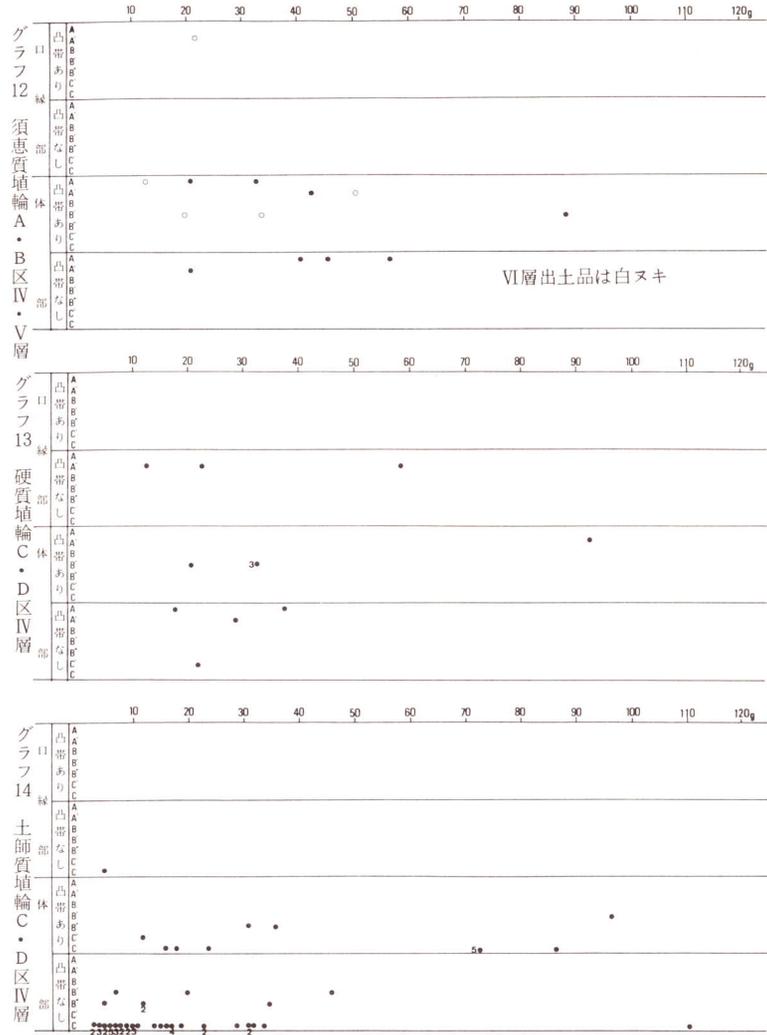


図24 遺物の摩耗度と重さの関係(2)

図25 遺物の摩耗度と重さの関係(3)



52

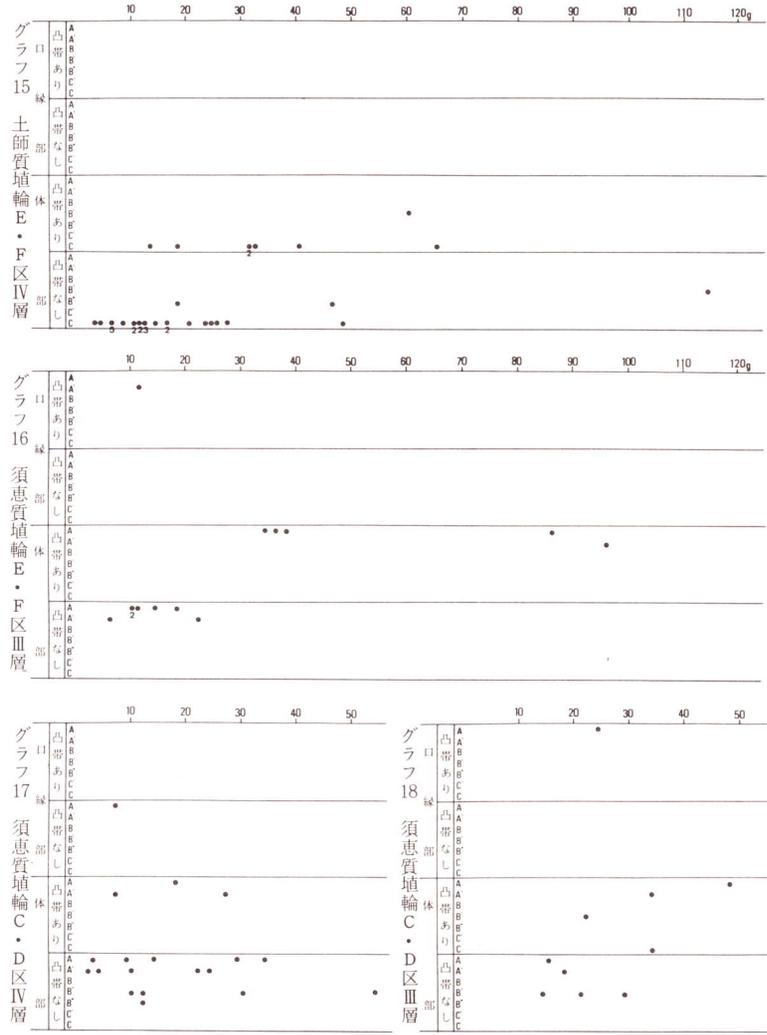
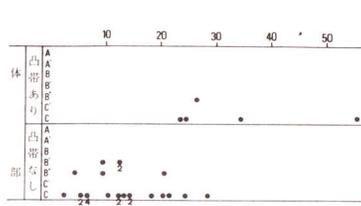
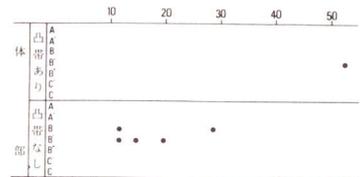


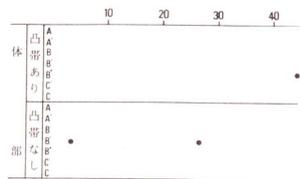
図26 遺物の摩耗度と重さの関係(4)



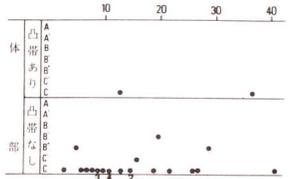
グラフ19 土師質埴輪A・B区IV層



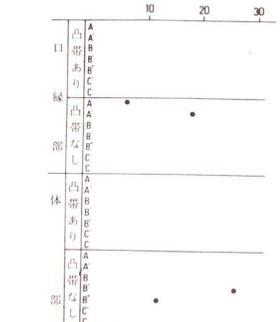
グラフ20 須恵質埴輪C・D区II層



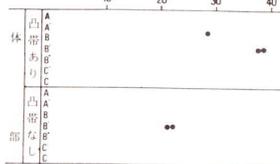
グラフ21 硬質埴輪C・D区II層



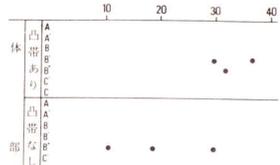
グラフ22 土師質埴輪C・D区III層



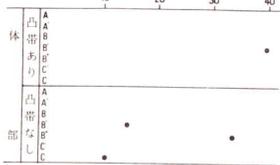
グラフ23 須恵質埴輪A・B区III層



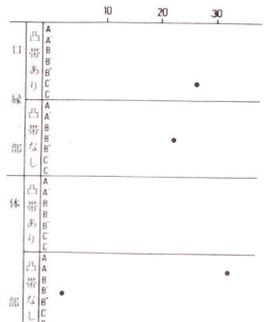
グラフ24 須恵質埴輪A・B区II層



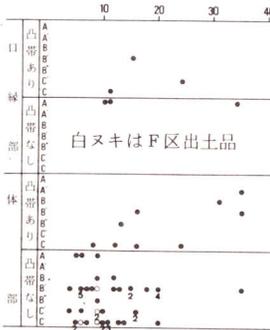
グラフ25 硬質埴輪C・D区III層



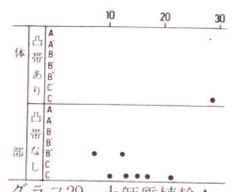
グラフ26 硬質埴輪A・B区III層



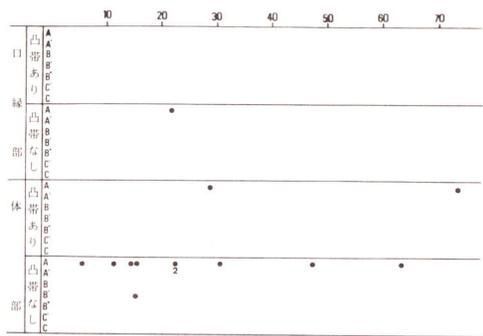
グラフ27 硬質埴輪E・F区IV層



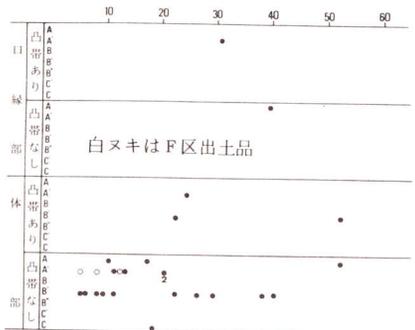
グラフ28 土師質埴輪E・F区大溝下層



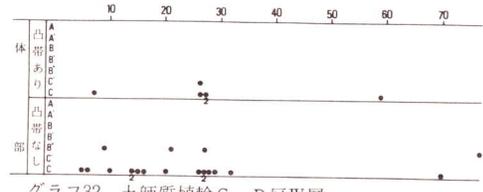
グラフ29 土師質埴輪A・B区II層



グラフ30 須恵質埴輪D区大溝上層



グラフ31 硬質埴輪A・B区IV・V層



グラフ32 土師質埴輪C・D区IV層

E・F区はIV層である。また対象となる円筒埴輪は焼成の違いにより硬さ（摩耗度・接合回数）に相異が予想されたため、高火度還元炎焼成による須恵質埴輪、高火度酸化炎焼成による陶質埴輪、低火度酸化炎焼成による土師質埴輪に分類して別個に集計した。また埴輪の部位分類は、口縁端部・底面部の残存する個体を口縁部・底部とし、他を体部とした。

摩耗度は円筒埴輪の外表面と折れ面を対象部位とし、基準は肉眼観察によって分別できる特徴を指標とした。外表面は刷毛目調整の残存状態を3段階に分類した。Ⅰ)調整が完全に残る。Ⅱ)調整は残るが摩耗を受けている。Ⅲ)調整が完全に失われる。折れ面は断面形状によって3段階に分類した。a)角が明瞭に残る(□)。b)角は残るが削れている(◻)。c)角が丸くなり平端面が失われる(◔)。Ⅰ～Ⅲとa～cとの組み合わせには次のものが確認され、両者をまとめて1つの記号として表記した。a-Ⅰ:A、a-Ⅱ:A'、b-Ⅰ:B、b-Ⅱ:B'、b-Ⅲ:B''、c-Ⅰ:C'、c-Ⅲ:Cとしてグラフの縦軸に示してある。

接合回数とは1つの破片に対して他の破片が何回接合したかということであり、グラフにおいてはドットの横位置に数字で回数を示してある。なお、ドットの下位置の数字は同一重量の個体が2

表11 遺物重量集計表

	重量 (g)	重量 百分率	1破片の 平均重量	寸	重量 (g)	重量 百分率
土師質	1254.2	49.7	18.8	包含層 大溝上層 大溝下層 土坑群 総重量	643.9	25.5
陶質	560.7	22.3	36.4		414.9	16.5
須恵質	709.4	28.1	27.3		1440.1	57.0
体部	2216.2	87.8	22.9		25.4	1.0
口縁部	250.8	9.9	26.4		2524.3	
底部	57.3	2.3	81.8			

個以上になる場合にその合計個体数を示してある。

### 2-3 グラフ集計の結果について

表11に基づいて資料の特性を述べてみよう。資料の約半数は土師質埴輪で、部位は9割弱が体部であり、そして主に大溝下層から約半

数が出土している。また1破片の平均重量を見ると土師質が約半数を占めるにもかかわらず陶・須恵質の破片が2～1.5倍の重量がある。体部も9割弱を占めるが口縁・底部の重量よりも軽い。従って土師質・体部は他の破片よりも細かく割れていることがわかる。

上述の全体的傾向を各包含層と遺構で比較したのが表12である。

まず包含層の傾向の特徴

表12 A・B区Ⅱ～Ⅴ層・大溝・Ⅴ層土坑群摩耗度百分率表

地区	材質	総計	1破片の							平均重量
			A	A'	B	B'	B''	C'	C	
Ⅱ層	土師	5.68					0.91		4.77	13.7 g
	須恵	8.66			1.28	7.38				31.5
Ⅲ層	土師	17.06				1.42	0.18		15.45	13.2
	陶	4.40				2.43	1.51		0.45	14.2
Ⅳ層	須恵	1.74				1.19	0.55			15.5
	土師	20.41				1.51	2.70		16.19	15.3
Ⅴ層	陶	19.86	2.70	4.03		12.29			0.82	22.5
	須恵	15.82	14.9	0.91						57.5
大溝上層	陶	1.14		1.14						8.3
	須恵	5.22	0.55	2.29		2.38				27.0
大溝下層	土師	6.78				1.13	0.66		4.98	21.7 g
	陶	6.26	1.27	2.37		2.04	0.11		0.46	29.8
Ⅴ層土坑群	須恵	9.30	6.79	1.74		0.77				27.6
	土師	35.9	2.06	2.39	1.50	9.16	2.23	8.14	10.04	21.0
Ⅴ層土坑群	陶	14.5	8.21	5.14	0.08	0.95		0.03	1.19	50.5
	須恵	27.1	24.8	1.91		0.33				63.3
Ⅴ層土坑群	土師	52.0		16.94		35.06				65.0 g
	陶	48.0		48.0						62.0

は上位層になるに従って出土量が減少し、よく摩耗している。また材質ごとの平均重量は表11と同傾であるが、必ずしも上位層にゆくに従って重量が小さくなる傾向にはなく各層でランダムな状況を呈する。大溝では上層の状況が前述の包含層の出土状況とほぼ同じ状況を示すが、下層は平均重量において2~1.7倍重くなっている。また、土師質のものにA・A'ランクの摩耗度を示す個性があることも注目される。V層土坑群は大溝下層の摩耗度・平均重量の値に近い傾向である。以上

表13 部位別重量集計表

地 区	須恵質 口縁部	陶 質 口縁部	土師質 口縁部	須恵質 底 部	陶質 底 部	土師質 底 部	地区別 百分率
II層 A・B C・D							}0
III層 A・B C・D	24 g 24 g						}1.4
IV層 A・B C・D E・F	7 g 11 g	69 g 48 g	4 g				}4.0
V層 A・B	21 g						0.6
大溝上層C 大溝上層D	79 g 22 g	30 g	28 g 22 g			9 g 42	}12.0
大溝下層C 大溝下層D	33 g 619 g	482 g	9 g 742 g	112 g	59g	339 g 12 g	}82.0
部位百分率	29.6	22.2	28.4	3.9	2.1	13.8	

より包含層と遺構の中で順調な堆積状況として認められるのは大溝下層とV層土坑群である。大溝上層の傾向は遺構（大溝下層・V層土坑群）と包含層との中間的傾向を呈し、強いて述べればIV層に近い状況となる。表14によって前述の傾向が明瞭に強される。接合回数が多いということは遺物が破壊されてから移動したという状況がより少ないということである。また摩耗度もA A'を主体

としていることより一層確実となる。

また、表13と比較すると大溝上層は口縁・底部を含むが接合個体がない。IV層は体部に接合個体をもつが口縁・底部を含まない傾向は中間的状況である。以上より埴輪の包含状況から推される遺跡形成について述べることにする。第一に包含層（II~IV）については破片の重量と摩耗度の間に相関的な関係はみられず各層とも攪乱された状況が想定された。第二に大溝上層は包含層と同様その形成には攪乱作用が関わっている。第三に大溝下層は同一平面のV層上面において検出された資料に較べると重量・平均破片重量ともに下層出土資料が勝っている。しかし接合しても完形になる個体はなく、接合して口・底径復元が可能な個体も極めて少なかった。第四に出土状況は斜面から流れ込んだ状況を呈していなく、溝内埋土の堆積は埴輪を運搬させるだけの流水量があったという

表14 摩耗度別接合回数集計表

地 区	材質	体 部	口 縁 部	底 部	材質百分率
IV層 C・D	土師 陶	C-5回 B'-3回			}10.5% 土師質 26.3%
大溝下層C	土師 陶 須恵	B-3回 A-13回 A-5回		A'-6回	}35.5% 陶 質 36.8%
大溝下層D	土師 陶 須恵	B'-2・B''-2回 A'-6回 A-21回	B''-2回 A-6回 A-2・A'-6回		}54.0% 須恵質 36.9%
位 百分率		69.4	21.3	9.3	

推定できない状況を呈している。以上よりI~IV層はその形成に関して耕作等の攪乱作用が要因となり、遺構検出面は削平

面であろう。大溝上層は形成後、包含層と同様に攪乱を受けたのだろう。大溝下溝は安定した層である。しかし、埴輪は原位性にとほしく溝内への投棄・廃棄が想定できる。(鈴木 信)

## 2. 砂層の粒度組成について

先に「地理的環境」の項で述べたように、調査地は和泉山脈の麓の段丘面上に位置している。また、「層序」の項で述べられたように、調査地の地山は厚く砂が堆積している。この砂が、いかなる営力で形成されたのかを知るために、粒度分析をおこなった<sup>(1)</sup>。

試料は、砂層が肉眼観察でラミナの発達や grading の現象が認められなかったため、任意に採集し(調査区西南隅、T.P.3.6mの地点)、火力によって乾燥させた後、100gを取出し、水洗後再び乾燥させ篩い分けた。篩の粒度間隔は-2φ(4mm)・-1φ(2mm)・0φ(1mm)・1φ(0.5mm)・2φ(0.25mm)・3φ(125μ)・4φ(63μ)である。

篩い分けの結果は、1φ=0.14g・2φ=6.56g・3φ=78.27g・4φ=6.14gとなり、残りの8.89gは水洗によって流出したシルト・粘土などがあたると考えられ、調査地の砂層は肉眼観察で知られたとおり淘汰の良いものであることが追認された。

森山昭雄氏は、木曾川平野において表層堆積物の粒度組成と地形要素の相関関係を論じられているが、その成果と今回の結果を比較すると、調査地の砂層は「砂丘砂」である可能性が強い<sup>(2)</sup>。

調査地の段丘面は、扇状地が紀ノ川の氾濫によって侵食されたものとする<sup>(3)</sup>見解と、扇状地上を被覆する沖積層が段化したとする<sup>(4)</sup>見解がある。今回の結果は、どちらかというとも後者になる可能性が強い。

しかし、一般に砂層には地域性と歴史性があり、紀ノ川流域においてさらに多くの試料を分析する必要がある。また、篩の間隔をさらに細かくする必要があり、現段階では調査地の段丘面を構成する砂層は砂丘砂である可能性が強い、という点にとどめ、遺跡を理解するうえで重要な段丘化した時期・旧地形の復元といった問題は今後の課題としたい。(木下晴一)

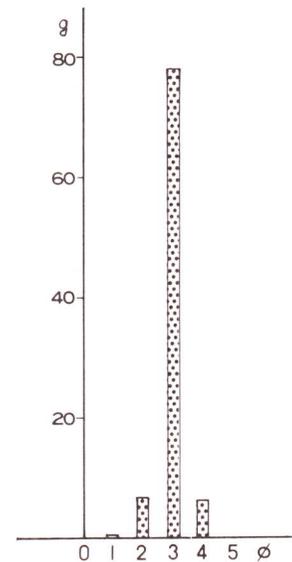


図27 調査区砂層の粒土組成

註(1) 分析にあたり、同志社大学工学部教授横山卓雄先生の御指導をうけた。

(2) 森山昭雄「木曾川平野表層堆積物の粒度組成」『地理学評論』50-2 1977年

(3) 水田義一「地理的環境」『国立和歌山大学学舎移転統合地造成工事に伴う緊急発掘調査報告書』和歌山県文化財研究会 1982年

(4) 日下雅義「紀ノ川の河道と海岸線の変化」『歴史時代の地形環境』古今書院 1980年など

## 第6章 ま と め

### 1. 調査のまとめ

今回の調査の成果をまとめると次の2点に集約されるだろう。

- ①調査地周辺の土地利用の変遷の状況を把握できたこと。
- ②車駕之古址古墳の規模及び年代、その性格を知る手懸かりを得たこと。

まず、①については、これまで調査例のなかった当該地域において、古代～中近世に及ぶ遺物が出土することによって、その間連綿と人間の営みが行なわれていたことが明らかになった。

本遺跡で最も古く溯る遺物は古墳時代である。Ⅵ層上面で検出した「大溝」は、今回の調査の最大の遺構であり、その性格が注目されたが、5章で検討した通り、中世段階にかなり改変をうけていることが明らかとなった。しかし、溝内には、中世遺物の他、車駕之古址古墳の埴輪が多量に出土していて、大溝付近にかつて車駕之古址古墳の外堤が通っていた可能性が強い。4章でみたように、車駕之古址古墳は、平地部に立地する周濠を有する前方後円墳であり、葺石・埴輪を備えている。しかし、後世の改変が著しく、車駕之古址古墳第1～第2トレンチでみたように、葺石・埴輪はそれぞれ原位置を保った状況にあるわけではない。そういう意味で、「大溝」は旧状を保っていないが、大溝南側の貼石は、外堤の裾部の葺石の残骸、溝は外堤の外側を区画する「外周溝」の<sup>(1)</sup>可能性がある。

一方、この「大溝」内及びⅡ層～Ⅵ層に於いて、奈良時代の製塩土器が出土している。当該地が<sup>(2)</sup>製塩を生業の基盤にしていたらしいことについては、既に先学の指摘するところであり今回の調査では、その「足跡」の一端を垣間みたことになる。

さらに、中世の遺構・遺物として、Ⅴ～Ⅶ層で検出した土壙・溝とそれに伴う遺物があげられる。これらには、瓦器椀・土師皿などが含まれていて、12～13世紀頃にごみ捨て場等に利用されたと考えられる。一方この段階まで「大溝」はオープンな状態にあって、土器等も捨てられている。

つづく、Ⅳ層上面では「素掘り溝」を検出している。遺物から、13～14世紀代に想定することが可能で、この段階で「大溝」は埋まり、田畑となったと考えられる。これ以降、当該地は、田畑として利用されることになる。

中世の土地利用状況は以上の通りであるが、2章で述べた通り、木ノ本は古代～中世にしばしば文献に登場しており、特に木ノ本八幡宮を中心として、東を木ノ本、西を西の庄と称していて、西の庄遺跡で中世の建物群が検出されているところからも、付近に中世の大きな遺跡が眠っていることは想像に難くない。中世の「木ノ本遺跡」は調査地よりさらに西の現在の木ノ本の集落よりの地域に想定されるだろう。

次に、②の車駕之古址古墳の規模及び年代についてである。4章で述べた通り、今回車駕之古址

古墳の測量とトレンチ調査を実施し従来不分明であった本古墳について多少なりともその実態を把握することができた。今一度その内容を確認するなら、全長約80m・後円部径約50mという前方後円墳であって、県下屈指の規模を誇ること、海拔4mという低地に立地する砂地の古墳で、周濠・葺石・埴輪を備えていること、主体部に緑泥片岩を利用しているらしいこと、中世以降にかなり改変をうけていることなどである。とりわけ、前述したように調査地の「大溝」が古墳外堤の改変したものであるとするなら、本古墳は県下でも稀有の整美な盾形周濠と堅固な外堤を備えた前方後円墳といえる。さらに、古墳近接のトレンチ、調査区の大溝及び包含層から得た多数の埴輪は、本古墳の年代及び性格を推定する重要な手懸かりとなる。埴輪は第3章で述べた通り、1次調整にタタキ・タテハケ・板ナデ・ヨコハケを施し、2次調整にB種ヨコハケ、C種ヨケハケ、ナデを施す。円形スカン孔を有し、底部に段をもつ特異な形状を有している。焼成は須恵質・硬質の窖窯焼成を基調としている。以上の特徴は、概ね大阪府泉南郡岬町淡輪の淡輪古墳群の埴輪と共通していて、畿内通有の埴輪や、紀伊の他の地域の埴輪とは異った特色を有していて、独特のあり方を示している。この種の埴輪の性格については、付論で詳しく触れるので、ここでは、その年代に限って考えておく。この種の埴輪は、須恵器技法（タタキ・C種ヨコハケ）を有し、須恵質の焼成を含んでいるところから、埴輪に須恵器技術が導入される頃の所産であると考えられる。そして、これらは技術的に共通する淡輪古墳群の埴輪とはほぼ同時期に考えることができる。しかし、その細部を検討すると淡輪古墳群の各古墳と車駕之古址古墳は、全て共通するわけではなく、一部技法の欠落がある。その相関関係を表にしたのが下表である。また、紀伊の古墳でタタキを有する大谷古墳・罐子塚古墳もこの表に加えておいた。

淡輪古墳群の埴輪技法の検討を行なった川西宏幸は、これらのうち技法が最も丁寧な西陵古墳を古く位置づけ、宇土墓古墳・西小山古墳には技法の省略化傾向が伺えるとして、これらを新しい段階に位置づけた。<sup>(3)</sup> 同じ観点でみるなら、車駕之古址古墳のそれは、西陵古墳と同様の丁寧な技法で<sup>(4)</sup> つくられていて、西陵古墳と同時期でややそれに新しい要素が加わっていると考えてよいだろう。

表15 淡輪古墳群との埴輪技法の比較

	1次調整			2次調整				底部の段	須恵器	備考
	タタキ	タテハケ	板ナデ	省略	B種	C種	ナデ			
西陵古墳	○	○		○	○	○	○	○		淡輪古墳群
淡輪にさんざい古墳（宇土墓古墳）	○	○		○		○		○		〃
西小山古墳	○	○				○		○	T K 73 ?	〃
車駕之古址古墳	○	○	○	○	○	○	○	○		和歌山市
罐子塚古墳	○	○		○	○	○	○	?		貴志川町
大谷古墳	○	○		○	×	×	×	×		和歌山市

一方、新しい段階と考えられる西小山古墳で、TK73型式併行もしくは舶載の陶質土器と考えられる土器<sup>(5)</sup>があって、須恵器導入期の年代が考えられる。西小山古墳は、金銅装の眉庇付冑をはじめ豊富な武器・武具の遺物が知られており、<sup>(6)</sup>中期中葉の古墳の典型例といえる。そうしたところから、車駕之古址古墳の年代は、それを僅かに遡る時期、5世紀第Ⅱ四半期の中にその年代を求めることができるだろう。

## 2. 車駕之古址古墳の位置づけ

以上のように、車駕之古址古墳は、中期に遡る前方後円墳であることが明らかになった。県内には中期古墳は僅かにしか知られていない。和歌山市内には、晒山1号墳、花山8号墳・10号墳などの中期古墳が知られているが、これらの立地は丘陵頂や山頂に立地しており、平地に立地する車駕之古址古墳とは性格を異にしているように思える。一方、貴志川町に、丸山古墳・三味塚古墳・罐子塚古墳<sup>(7)</sup>という三基の径30~40mという大型円墳があって、いずれも貴志川中流左岸の河岸段丘上の平坦地に立地している。丸山古墳が、縄掛突起と副室を有する特異な箱式石棺を内部主体として在地色が強いことや、この地域が四方を山に囲まれ地理的に一つのまとまりをもっているところから、在地の有力者の累代的な墳墓と考えられる。そうした中で、この中の一基の罐子塚古墳には、タタキを有する埴輪<sup>(8)</sup>があって、ほぼ、車駕之古址古墳と平行する年代が考えられていて、車駕之古址古墳を位置づける上で参考になる。

車駕之古址古墳の周辺には、2章で述べた通り釜山古墳、茶臼山古墳があって、木ノ本古墳群を形成している。釜山古墳・茶臼山古墳のいずれもその年代の決め手を欠くが、釜山古墳が腰高の墳丘を有するところから内部主体が横穴式石室である可能性もあり、車駕之古址古墳→釜山古墳とつづく可能性が考えられる。それはともかく、これら3古墳がいずれも平地に立地する県下屈指の大型古墳であり、累代的に構築された状況を見るならば、在地の中でも相当の権力を有した人物と考えねばならないであろう。

そうした場合、注目しなければならないのが先に埴輪技法の共通性を示した淡輪古墳群である。淡輪の大型古墳は、後背地に相当する平地が少なく、また文献史料との対応から、その本貫地は、山を越えてすぐ南の紀ノ川北岸地帯にあることが指摘されている。そして埴輪技法の共通性は、両者が共通の生産基盤にあった可能性をさらに補強するものといえる。淡輪古墳群は畿内の古市古墳群などの大型古墳と比較しても遜色のない規模と内容をもっており、そういう意味で、淡輪古墳群の被葬者は紀ノ川北岸一帯を掌握した有力者であったとみることができる。それに対して、木ノ本古墳群は、そうした被葬者に従属した在地の相当の有力者の墳墓と考えてよいだろう。

## 3. 紀ノ川北岸地域の地域的特質

最後に、車駕之古址古墳の存在基盤についてみておきたい。2章で述べた通り、当該地は、紀ノ

川の旧流路が南に流れを変える位置にあたって、紀ノ川水上交通の要衝にあたる。紀ノ川が古墳時代にあつて重要な動脈の役割を果たしていたことや、その河口付近が外港として機能していたことは多くの人が指摘するところである。<sup>(9)</sup> 鳴滝遺跡の倉庫群や大谷古墳の国際色豊かな副葬品などをあげるまでもなく、紀ノ川北岸は内外の文物を導入する窓口となっていたのである。そういう意味で、車駕之古址古墳の被葬者たちもこうした海上活動に深く関わっていた可能性が考えられる。和歌山県内には、この他有田市の淑古墳、東牟婁郡那智勝浦町下里古墳など農業に基盤を想定するよりも、海上活動にその基盤を求められる古墳がいくつかある。<sup>(10)</sup> <sup>(11)</sup>

『日本書紀』の神武東征説話では、神武の兄五瀬命が紀の国の男の水門で凄絶な戦死をとげ、竈山に葬られたという。神武東征説話は、九州と畿内との関係を暗示する伝承として名高いが、そのルートはまさにある時期の瀬戸内海上交通の状況を示している。竈山=釜山は音が通じていて、そうした当代の交通関係の中で、まさにこの地域の特質を示唆しているように思えてならない。

(坂 靖・田村 悟)

註(1) 一瀬和夫ほか『允恭陵外堤の調査・国府遺跡80-3区』1981年など。また、本古墳との関係が考えられる淡輪にさんざい古墳でも「外周溝」が存在するとされている。

藤永正明・岸本道昭『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅳ』1982年

(2) 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』1968年

(3) 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」(『大阪文化誌』2-4)1977年

(4) 鱈付埴輪の存在が参考になる。西陵古墳には鱈付埴輪があつて、この種の埴輪は、4世紀～5世紀初頭を中心に盛行することから、それのない車駕之古址古墳より古い年代が考えられる。

(5) 藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』1981年

(6) 末永雅雄「淡輪村西小山古墳と其遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯 1932年

(7) 三宅正浩「紀伊における古墳時代中期の一樣相」『求真能道』1988年

(8) 前掲注(7)

(9) 門田誠一「大和政権の交通的条件」『考古学と古代史』1982年

(10) 羯磨正信「和歌山県有田市椒古墳」『日本考古学年報』16 1968年

(11) 巽三郎『下里古墳発掘調査報告書(第1次)』1975年

## 総括 調査の総括と学術上の課題

和歌山市教育委員会から本遺跡の発掘調査についての協力依頼が、同志社大学考古学研究室にあったのは、1986年1月のことであった。

森浩一教授の指示を受け、和歌山市教育委員会による行政上の課題と、考古学研究室のもつ教育研究上の課題が、当該地点の発掘調査の実施によって相互に有意であるかどうかの検討を含めた現地を観察をおこなったのはその直後である。

和歌山市木ノ本字釜山周辺は、八十メートル級の前方後円墳である車駕之古址古墳をはじめ、釜山古墳、茶臼山古墳などによって構成されている木ノ本古墳群があって、遺物散布地の存在も古くから知られている。一方、その西方には、中世の集落址が発掘調査によって確認された西ノ庄遺跡もあって、木ノ本八幡宮の西部から東部にかけて古代から中世にわたる遺物も散布している。つまり、木ノ本の集落には周知の遺跡が多い。中でも、明治31年（1898）に発掘されて、直刀や瑠璃玉、装飾用の金銅製品などを出土したとする釜山古墳や、低平な封土を残しながらその形態をよくとどめている前方後円墳の車駕之古址古墳は、保存状態もよい。

車駕之古址古墳の北側には、周湟の痕跡を残して水田が営なまれ、木ノ本公民館に隣接している。この西側の水田を埋めて木ノ本児童館の建設が計画されたことが調査の要因である。木ノ本Ⅲ遺跡と命名されている地点に相当する。つまり、行政的にも無視できない地点での建築計画であり、和歌山市教育委員会による事前の発掘調査が検討された上での同志社大学考古学研究室への調査依頼であった。

予察の結果は、建築計画の予定地点に関する地表面の遺物の散布は全く確認されなかったが、隣接地点で埴輪片や瓦器片の散布を確認した。このことは、水田耕作によって耕土中の遺物を丁寧に排除したか、遺物包含層が耕作面より下部に位置していることを予想させた。しかも、車駕之古址古墳の周湟に隣接しているだけに、水田の床土面以下の状態の観察は、車駕之古址古墳を考える上でも無視できないことを示していた。つまり、考古学上の課題は、車駕之古址古墳の墳丘部や主体部を現状のままに保存することを前提に、その周辺部の部分的な発掘によって、車駕之古址古墳に関する基礎的な資料の記録化をおこない、紀ノ川下流域の古墳文化の一端の究明と、中世に関する資料の収集を、西ノ庄遺跡との対比に焦点をしばることで有意義に設定できるものと確信した。しかも従来から要望がありながら実施されなかった車駕之古址古墳の実測図の作成とその公開が、関係者の協力によって可能となり、今回の調査によって実施することを確認した上で、1986年3月3日からの発掘調査となったわけである。

したがって、今回の調査は、行政上の課題と、考古学上の課題がそれぞれの目的にかなう形で進んだことになる。考古学上の成果については、以上の各章で触れたところであるが、出土資料のうち埴輪とその出土遺構、瓦器や中国産輸入陶磁器を含めた中世の遺物群などの検出は、紀ノ川

下流域の実体の一部をよく示すものであり、課題に則した考古学上の成果となった。

課題に照らして調査の経過をたどると、テストピットの観察を基礎とした第一遺構検出面は、まさに中世の遺構面であり、在地の瓦器碗の破片や東播磨の魚住窯の片口鉢、中国産の青磁・白磁などの搬入資料が出土し、ほぼ平行して走る素掘り溝などが検出された。青磁の中には、浙江省竜泉窯で生産された蓮弁文碗があり、白磁では福建省の徳化窯などで生産された口禿の皿などが含まれていて、魚住窯の片口鉢とともに13世紀の後半から14世紀の前半代の年代が与えられるものであった。

調査の前半において、発掘区の全域を対象としてこの時期の遺構面を精査したのは当然である。

中世の木ノ本庄の位置は、木ノ本八幡宮の東西にあって、その西を西ノ庄と呼んでいることから、発掘地点が木ノ本郷に含まれていて、そのままの地名を継承していることはあきらかである。つまり、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」にみえる大安寺の墾田の一部であり、その後、東大寺の崇敬寺領となったことが、康和2年（1100）の「東大寺政所下文案」に別院崇敬寺所領紀伊国木本庄とあることから知られている。すでに古くから開発されていたことになる。

第一遺構検出面で出土した素掘り溝が、畝状遺構として全面に検出されているが、その土地利用が何であったかを決定することが現時点では出来ないが、農業に関する遺構である可能性は高い。農地を含めた扇状地の土地利用が、水利との関係で検討されようが、限られた調査区から知り得た情況のみではいかんともしがたい。中世の土地利用についても、検討課題が残されたことになる。

発掘区の北側で東西方向に走る溝が検出された。幅4.5m、深さ30cm前後のもので、黒色粘土が堆積し、南側には護岸用と考えられる石積みが出土している。この溝の中からは、若干の中世遺物を出土しながら、大量の埴輪片が検出された。調査の後半における主要な遺構である。出土の資料からは、車駕之古址古墳との関係を抜きにしては考えられないことがあきらかであり、調査の最終段階に至って車駕之古址古墳の後円部に接する水田中にテストピットを設定することとなったのも、この溝から出土した多量の埴輪片を見た地主の協力によるものであった。車駕之古址古墳の封土上から採集された埴輪片とも合致する溝からの出土資料は、本調査の目的や課題をより明確にするものであった。

紀ノ川流域の古墳文化を究明していく上で、和歌山市内の大谷古墳などとともに木ノ本古墳群は、その下流域においては、とりわけて重要なことは古くから指摘されていながら、その詳細については不明のところが多く、今回確認された埴輪の製作技法が典型的な淡輪技法であることも調査成果の一つであった。課題の一端が明確になったことになる。

なお、発掘調査に並行して実施した車駕之古址古墳の墳丘測量も、考古学上の基礎資料として有意義であるばかりか、文化財保護の上でも活用されるはずであり、調査目的にかなうものであった。

一方、調査が進行する中で、地元住民や関係者から遺構の保存についての要望がだされた。とりわけ多量の埴輪片を出土した溝とその護岸用の礫群を何とかして残したいというものであった。そ

ここで検討されたのが遺構の移設保存であり、部分的な切り取り移設である。技術的には若干の困難さがあっても、樹脂注入による前例を生かして対応することとしたが、予算的な困難さは関係者の熱意と協力によって実施する以外はなかった。移設のための作業の経過については写真に示す通りであるが、関係者の協力によって遺構の一部が保存されたことは、調査目的にかなう調査成果であることはいうまでもない。(鈴木重治)



①樹脂注入



②移設のための運搬



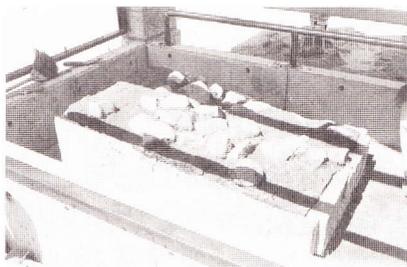
③覆屋の建設



④実測図との照合



⑤保存施設の完成

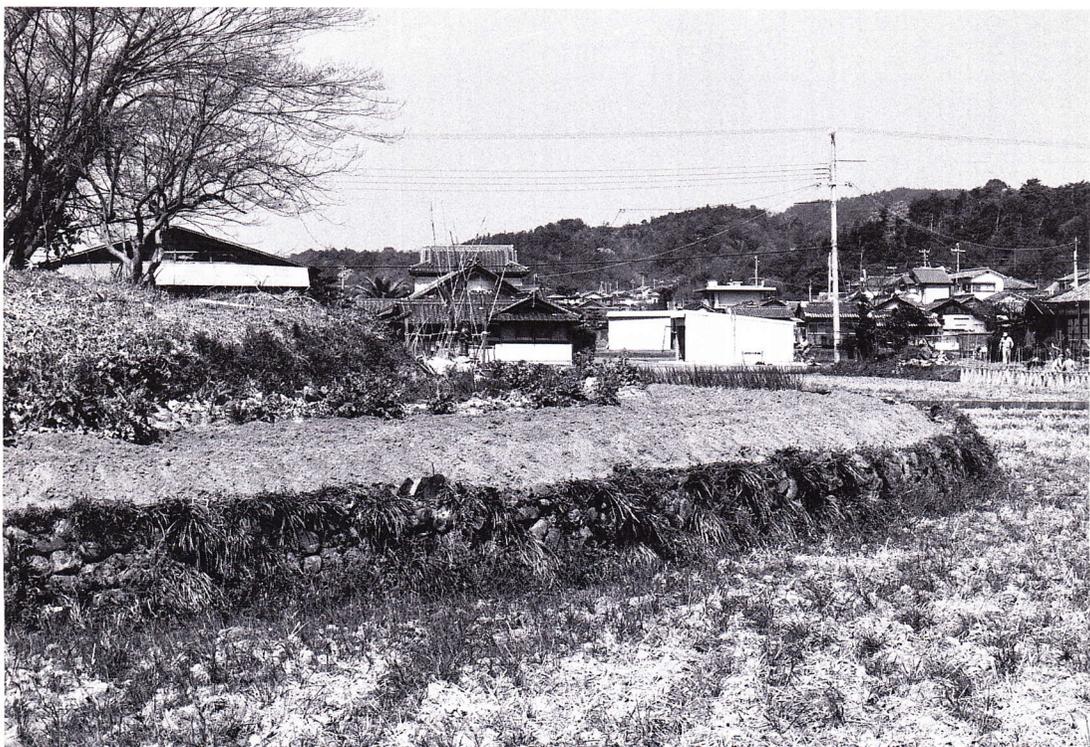


⑥保存施設の内部

#### 大溝貼石の移設作業



墳頂部立石（片岩が墓標に用いられている）



後円部の現状



上：第1トレンチ  
葺石検出状況  
(近景)

下：第1トレンチ遠景  
(奥が古墳)

木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡発掘調査報告

平成元年3月31日

発行 和歌山市教育委員会  
和歌山市七番丁23番地

編集 同志社大学考古学研究室  
京都市上京区新町通今出川上ル

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市橋本町36番地